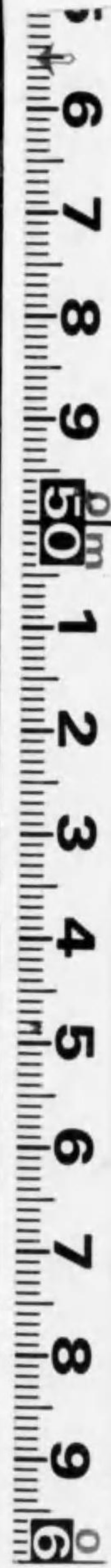
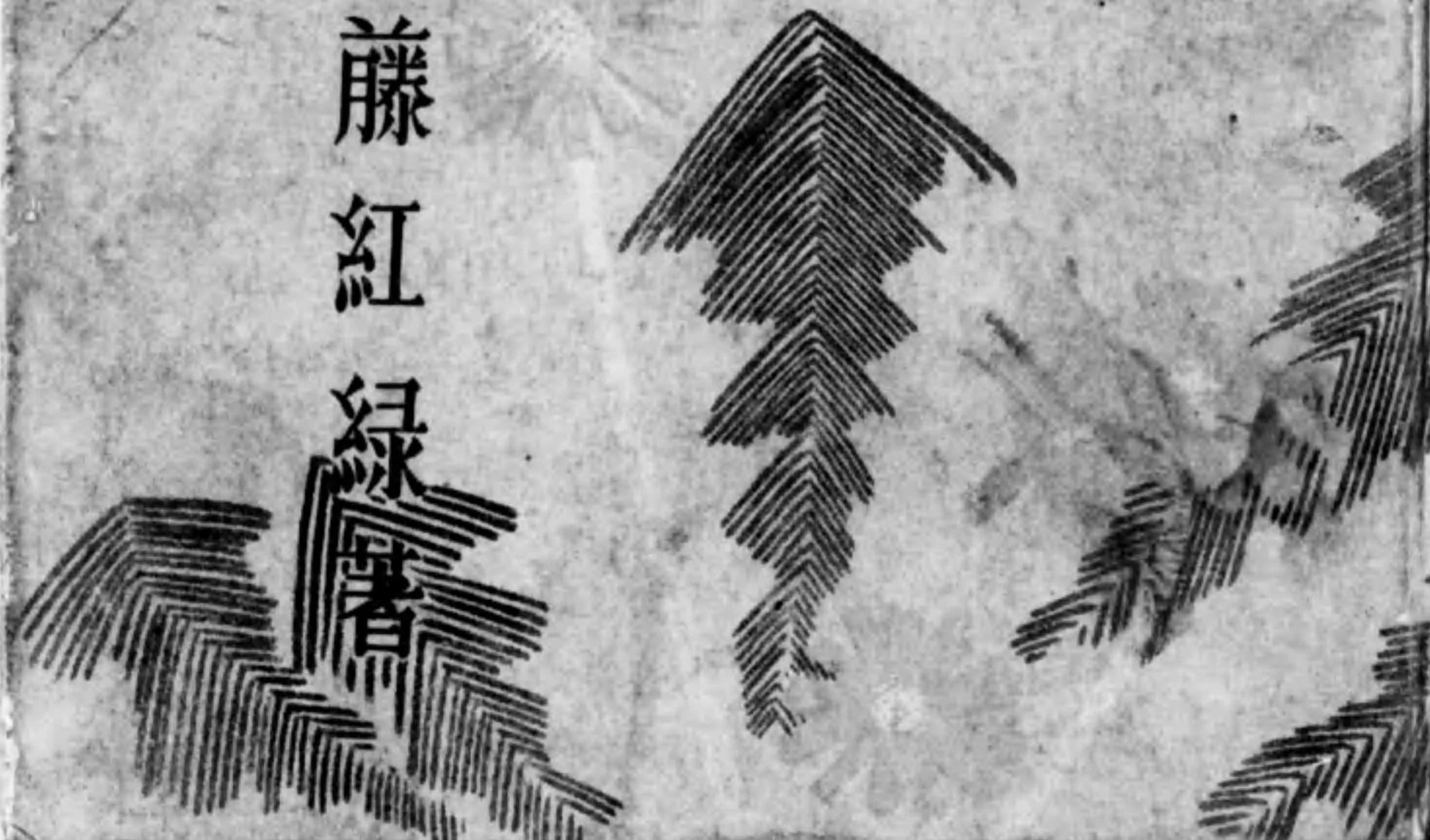


説  
26

前編

鳩の家

佐藤紅緑著



始



361

特 274  
373



鳩  
の  
家



佐藤紅緑共





目次(上巻)

幼 <small>わか</small> な顔 <small>かほ</small> ：	一——八五
波 <small>なみ</small> がし <small>ら</small> ：	八六——一六六
光 <small>ひかり</small> と暗 <small>くら</small> ：	一六七——二三〇
巢 <small>ね</small> 立 <small>た</small> ち：	二三一——二六七
春 <small>はる</small> ：	二六八——三八二
急 <small>いそ</small> 流 <small>なが</small> し <small>ら</small> ：	三八三——四三四

# 鳩はとのの家いえ

佐藤紅緑

幼わかな顔かほ

一

海面うみづらは今いまま平ひらに光ひかつて居まる。徒か歩ちで渡わたれさうな岸きし近く甲か岩い烏は帽は子し岩い、少すこし離はなれ  
て離はなれ岩い、鰐う岩い、もつと左ひだりの方ほうに親おや子こ岩い、飛とびくくに梯はし子こ岩い、潮しほが差さしてくる  
と鎗あき先のさき檣つらに心こころえる尖とんがり岩い。是こゝ等らの岩いは悉ことごとくく静しづかに夕ゆふ日ひを真ま向むきに受うけて勢せい揃ぞろをし  
てるかかの様やう。緩ゆるいくくちよろく波なみが媚こぶるかかの如ごとく裾すそを撫なで上あげては、どうか  
すると小ちひさな岩いと岩いとの間まだけだけに突つ拍ぱつ子しも無ない白しろい泡あわを立たて、恰ちやうど度ど子こ供どもが大人おとな

に賣はる様に大きな岩の中腹まで飛沫を浴びせる、と霎時の間元との平和に復つて、少しばかりの波をさらりと寄せては乾き掛ける砂を濡らして立戻る。

陸奥國の青森灣を抱へた淺蟲の里、秋の日和が續くと夕日が紅みを帯びて三時頃からめきくと弱り出す、此邊は秋が短かくて冬が長い。山と海とに挟まれた幅の狭い小村であるが、温泉場だけに夏は西洋人の二組位が見える。蜜柑箱の様な西洋館もある。ホテルと名の付いた日本風の宿屋もある。其處は停車場近くの土地で、昔からの淺虫の村といふのは其れよりも少し上り氣味に、山を掘り割つた赤土の一筋町で、大きな石を屋根に並べた戸毎の軒に大根が簾の様に編まれて干されてある。其町筋を斜に夕日が泳いで居る。

材木に腰を掛けて三人の小兒が海を眺めながら話して居る。一人は色の黒い縮れ毛の鍛冶屋の虎公、一人は駄菓子屋の文公、其の間に介まつて居るのは文公の母が東京から預けられた里子の篤子である。虎公と文公は同じ年の十二、篤子は

十歳である

毎も三人は此處に来て遊んで居る、古い雑誌や繪草紙を讀む、お伽話をする、妖怪談になると語るものも聞くもの、一緒に恐ろしくなつて三人は肩と肩とを押し付ける、奇妙な魔力のある玉の話をすると同様に眼を青天に向けて、爾いふ玉が欲しいものだ小さな胸を跳らす。今日は此の土地に傳はる古くからの傳説に語り耽つた。山を負ひ海を控へて、半年は雪の穴倉に籠つて暮らす此の土地は種々な神秘の色を帯びた浪漫的な話に富で居ると共に、軽い滑稽談も少なからずあつた。三人は夕日に頬を温めて話の佳境に入るに従つて眼を濡ましたり、頭を掉たり、たわいなく聲を出して笑つたりした。其度毎に二人は篤子の顔を覗いた。篤子が泣けば二人も悲しくなる、篤子が笑へば二人も笑ふ。しみじみとした静かな物語は乳母の子の文公が上手であつた。軍の物語は鍛冶屋の虎公が上手であつた。

三人は今義經の話をして居る。義經は乾度魔法の玉を持って居たらうと文公が言た。

「あれ、彼處だよ」と虎公は感慨に堪へざるものゝ如く對岸の右端を指さした。眩しくもない冬の夕日は對岸の真中よりもすつと左の方に沈みかけて、長く伸ばした右の方は函館の沖を望む龍飛岬より九艘泊、此方の陸續きの右端觀音岬と相對して津輕海峡の裂け目は煙波標、夕霧の裾を日の色が薄い紗の如く抹すと、波の金箔が小舟の往き交ふ毎に天に消え又た天から降て來る。

「あれ、彼處の白く光つてる處があるだらう、ぼつちり指の先ほど……彼處迄は十里も二十里もあるよ……其ら暗くなつた、又た明りくなつた、豆粒ほどに見え、彼處の少し左の方に三厩といふ處があるんだよ、其處から義經が蝦夷へ渡つたんだ」

「義經がか？」

「うむ」

「彼處まで來たのかい」

「うむ、して舟で以てもつと奥へ行たんだ、彼處には義經の馬の蹄迹が印いた石があるつて親父が爾言たよ」

「随分遠くまで行たのね」と篤子も恍然と其方を眺めた。繪草紙で御馴染の英雄の足迹！三人は妙にしみじみとした氣持で互に黙つて了つた。沈々として日は對岸の森に消えて行く。名残の光は森の背後をぼうつと明りくしたきりで、麓の村は暗に包まれた。何時の間にか細い三日月が薄すりと水色の天に出て居た。

「御嬢ちゃん、く」

乳母の聲が山の下から聞えるまで三人は仍且黙つて居た。

「まだ此那山さ連れ出して、お嬢ちゃんに風邪でも引かしたら什麼するだ、文公お前の故だよ」

恚う言て乳母のお濱が怒鳴り出した。文公は人に大きな聲をされるのは大嫌で、誰かゝ怒つた顔をしてるのを見ても頭が痛み出す程の弱虫なので、母に叱られてびくりと肩を慄はしたきり僣僕の様子に背骨を圓くした。

「私が文さやんを連れて来たのよ、乳母怒つちや厭よ」と篤子はお下髪を背後にぶら／＼させて乳母の方に駆け寄つた。お濱の顔中が俄に崩れ出した。

「まあ御嬢ちゃん、乳母は怒りはしませんよ、文公御嬢ちゃんが恚那にお前を庇つて下さるだよ。」

乳母の言葉に二種ある、一つは東京の言葉で是れは篤子に對してばかり使ふ。

一つは此地の方言で、我が子の文吉に對しても村の人々に對しても使ふ言葉である。

「何をしてるんだよ、もう暗くなるに」とお濱が虎公の方を向いた。

「今ね」と虎公は縮れ毛の頭を掻いた。「俺あ何だよ、大きくなつたら義經になるだよ」

「馬鹿こくな、二本涕垂らしてる義經なんてあるものか」とお濱が笑つた時虎公が急に慌て、二本棒を啜り上げた。「涕垂らしたつて可いやい、大きくなれば癒ら

い」  
「さあ飯だ、虎公お前のお母ら先刻からお前を探してだよ」

いかにも麓の方から女の聲が聞える。

「虎こう、俺の虎公よ」

四人は山を降りた。「晩に來いよ、嬢ちゃんの雑誌を見せてやるから」と文公が



言た。

「被來やいね」と篤子も言た。

「うむ、巳之吉も連れて行かあ」

虎公は三人に別れて村の端を指して走り去つた。

「又公お前もなあ」とお濱は虎公の元氣好い走り状を見送つて言た。「お前も男ならあの位強くならなきやなんねえぞ」

「力が弱くても學校の方なら一番だい」と文公は不平さうに呟やいた。

「え、爾よ、文ちゃんが一番だわよ」と篤子は乳母の手を握つて其れを振りながら言た。

「又た文公の御最負をなさるのね」

とお濱は快さ相に笑つた。

村の中程に一間間口の小さな駄菓子店がある、其れはお濱と篤子と文吉と三人

暮しの家である、店には薄暗い洋燈の光が蔀を下した隙間から漏れて居た。お濱が中へ入つて店の洋燈を茶の間に運ぶ間に、篤子と文吉は爐側に坐つて埋火を掻き起し、小さな手を翳してあたつて居た。二人の頭が鉢合せをする許に八の字に近寄つて、風に吹かれて來た紅い頬がほつかりと炭火の明りで暗の中に浮いて見え

た。

篤子は如何なる人の子であるか、其れを語る前にお濱の事を語らねばならぬ。お濱の父は請負師であつた、無論田舎の事で大したものではなかつたが、其れでも鐵道の開けた當時は鐵路の敷石を此の山から掘り出したので村中での羨やまれ者になつた、商賣の用向で一年に五六度は東京へ出る、一人娘のお濱を連れて博覽會を見物に行つた事もあつた。片田舎で朽ちさせるよりか亭主を持たせるなら東京者が可い、第一辯口が達者で小手先が利くから俺の力にもなる、老請負師は都會崇拜者であつた。而して行儀見習としてお濱を深川の酒問屋へ奉公させた。辯

口と小手先の達者な者は東京に樹で量る程ある。お濱は一人者の化粧品屋と深い仲になつた、而して文公を生んだ、次の子を腹に宿した時に良人は葬式に行くと出て出たきり歸つて來なかつた、一月二月半年！良人の友達に訊くと一向知らぬと言ふ。臺灣へ行たらうといふ者もある。お濱は男といふものゝ薄情を知た。辯口と小手先で虚偽の多い都會人の恐るべきを知た。彼女は二歳になる文吉を伴れ大きな腹を抱へて田舎へ歸つた、と間もなく父は借金を残して病死した、不幸は是ばかりでない、彼女は種々な苦勞の爲に胎内の子が死んで生れた。

彼は憂き事の多かる中にも、楽しみは村人の親切にあつた。「可愛さうに、皆なで面倒見てやるべいよ」米や味噌醬油、小遣まで寄せ集めて人々はお濱が肥立つまで世話をした。

三

肥立は至つて好かつた、お濱は大きな乳を抱へて情を受けた戸毎に禮廻りをした、而して乳不足の嬰兒を見ると誰彼を問はず自分の乳を與へた。「私は此村の御世話になつたんだから私の乳は村の所有です」憊う言つて貧しき母達を喜ばした。併し其れはほんの一と月許でお濱の乳は村有でなくなつた。といふのは篤子といふ嬰兒が此村に生れたからである。

或る雪の降る夜、東京からの終列車で此の淺蟲驛で下車した二人の男女があつた。身装と言ひ態度と云ひ男は何となく鷹揚で細かい事には拘はぬと言た様な幼々しい中にも何となく心配さうな色が其若い顔にも見られた。女は華美作りの其頃東京の花柳界に流行つた厚羅紗の外套に毛皮の頸巻をして居た。大きな丸鬚の横から赤い手柄が特に目立た。二人とも餘程疲れて居た。男は南篤彌二十六歳、

女は同妻新子十九歳と宿帳に書いた。

宿へ着くや否や女は畳へ倒れて苦しんだ、女は産氣付いたのであつた。醫師が来る、産婆が来る、曉近く雪晴れて美しい朝日が對岸の雪景色を輝やかす頃、玉の様な女の兒が生れた。篤子といふ名を付けた。けれども女の乳が足りなかつた、宿の主人夫婦は商賣氣を離れて乳母を探した、到頭お濱を頼む事になつた。「東京の人！」恚う聞いてお濱は眉根を寄せた。「東京の人は薄情だ、東京の者は恨がある、乳なんか與るもんか」恚う言たもの、彼女は又た自分が男に捨てられ死兒を産んで村人の厄介になつた事を思ふと。「困るのは誰しも同じ事だ、旅で御産をして乳がない身になつたら什麼なに辛からう」と思ひ返さずには居られなかつた。彼女は篤子の乳母になつた。一と月は経た。お濱は東京で奉公しただけに言葉も通すれば何かの仕打も東京式だといふので二人は夜晝お濱を傍から離さなかつた。併し幸福は此の二人に續かなかつた。二月月目には宿屋の拂が滯はつ

た、三月目には時計やら簪やら指環までが無くなつた。篤彌も新子も毎日の様に東京へ手紙を出した、けれども一向金を送つて來ない、二人は乳母に知れぬ様に顔を見合はせて溜息を吐いた、と或日百圓の爲替券に添へて一封の手紙が篤彌の家から届いた。表書は南總五郎、其れは篤彌の父の名である。

「金が來た」と恚う言て二人は飛び立つ様に喜び勇んだが、其日珍らしく泣聲が襖から漏れた。

「厭です、私は死でも厭です」と新子が言ふ。

「僕だつて厭だ、けれども父親が此那事を言てよこしたんだからね、其れに今までとは違つて篤子といふ子も出來て見ると、二人が何時までもぶらぶら遊んでるわけにも行かないからね」

「渴えて死ぬなら親子三人で死にますわ」

「其れは爾だ、けれども何も好んで渴え死にをしなくとも可いちやないか、東京

へ歸つて當分の間、ほんの當分の間別れて居れば僕は屹度お前を引取る様にする  
からね、親父が何を言たつて親類が何と言たつて其時には僕にも量見があるから、  
其れまで辛抱して居てくれ」

「だつて御歸りになつたら奥様をお迎ちになるんでございませう」

「馬鹿言へ、そんな事があるものか」

散々泣いたり笑つたりした翌日、二人はお濱に慙う言た。

「一寸東京へ行つて来るから五六日此の子を預かつてくれ」

「え、宜うございませう」とお濱は答へた。

二人は心を篤子に残して淺蟲を立た。

其れから又た一月二月は経た、けれども二人は歸つて來ない。

「少々都合があつて歸りかねるから此方から迎が行くまで待てくれまいか、毎月  
の手當に二十圓づゝは屹度送る、其他に金の費目があるなら何時でも言てよこす

が可い」

此の手紙は篤彌から來た、而して同じ頃に新子の許から友禪縮緬の着物や帽子、  
玩具まで添へて送つてよこした。送り主の名は東京京橋區出雲町…小槌屋小  
新！

「はてな」とお濱は首を捻つた。

長い間に恚ういふ事だけがお濱に解つた、若い旦那様は藝者で、旦那様は東京の會社や銀行に關係してゐる富豪の息子である。が、什麼いふ理由か夫婦にはなれぬらしい。

「何れにしても立派な御身分の方の御嬢様だ、毎月戴く二十圓で自分親子がのめく」と遊んで暮らして行けるのは御嬢様のお庇蔭だ」

恚う思つて彼女は小遣取に駄菓子屋兼玩具屋を初めた。田舎の事として東京風の玩具を持って遊ぶものは一人もない、其代りに駄菓子だけは盛に賣れる。

篤子は段々生長くなつた。漆の様に光澤のある髪、ばつちりとした黒眼、其れだけでも色の白い顔に對照が好いのに、頬が少し下膨れに、口が小さく、笑ふ時には眼も鼻も溶けさう、而して絶えず何かを唄つて居る。百姓共の盆唄なぞを

能く記憶えて廻らぬ舌に唄ひ出すのでお濱ははらくして制めるのである。

「御嬢ちゃん、其那唄を御唄ひなすつては不可せんよ」

「だつて皆なが唄ふぢやないの？」

「皆なが唄つても御嬢ちゃんだけは不可ません、貴方は村の人と違ひますから」

彼女の篤子自慢は村中の一口話に上る位で、お濱は我が子よりも里子を可愛がつてると噂せられた。

「預かり者だ、疵一つ付けても申譯があんめえ」彼女は毎時も恚う言て文公に聞かした。

「なあ文公、お前は御嬢ちゃん之恩を忘れちや不可えよ、御主人だよ、大事にしろよ、お前の妹だよ」

「主人が妹かい」と文公は合點ゆかぬ顔をして訊き返した。

「半分主人で半分妹だといふ事よ、解らない童だな」

此那問答は屢々であつた。けれども文公は解らぬながらも篤子は自分よりも位の高いものであるといふ事だけは意識した。

曾に文公ばかりではなかつた。東京を天國の如く崇拜して居る村人は、東京で有名な富豪の御嬢様だといふ事を聞いて、先づ肝を潰した。「青森の市へ行たつて其那豪えんの子は居なかんべえ」恚ふ言て村人は此村の名譽の様に思つた。無論田舎の頑健な骨太の而して女でも男でも熊の子の様に泥だらけになつて跳ね廻つて腕白共とは違つて、骨細の纖麗な而して子供ながらに何處かに都風の氣品のある篤子は確かに鶏群の鶴であつたに違ひない。

學校へ行く頃になつてから、果して成績は優等であつた、容色の好い子は何かに就けて徳のあるもので、腕白共も篤子だけには悪戯をする者がなかつた。鼻垂れの頬紅の女兒どもは篤子の辨當を持ってやつたり、手を曳いてやつたりする事を光榮と思つた。

篤子は段々生長くなつた。彼女の前途には幸福が輝いて見えた。家に居ると乳母が嘗める様に可愛がつてくれる、學校へ行くと先生初めお友達が親切と敬意を以て迎へてくれる、而して外で遊ぶと大人も子供も荒い言葉一つ掛けるものがない。篤子は恰度春の花が暖かに軟かい風に育てられて行く様に育つた。毎日毎日朝に眼を覺ますのが嬉しかつた。

實際此の村の人達は淳樸な民であつた。誰か家を建てると言へば、威なで寄つて集つて瞬く間に建てゝやる。主人に死なれた家があると葬式の事から後々の事まで世話をしてやる。恚ういふ事の主宰をするものは長春寺といふお寺の和尚さんである。左の頬の下に瘤があつて、圓い顔は一面に皺だらけでごぼん／＼と大きな咳をして歩くのが癖であつた。途中で子供に逢ふと大きな手を頭に戴せて恚ふ言ふ。

「早く大きくなれよ」

丁度其れは自分の手を以て多くの子供を引き延ばすかの如き態度である。篤子は此の和尚様が大好であつた。彼は子供を集めては代り／＼に頬の瘤を搔かせるのが好であつた、而して齒の無い口をむぐ／＼させて「なまみだぶ／＼」と唱へる。或日和尚は例の如く多勢の子供に瘤を搔かせた、と順番が篤子に廻つた。

「私厭よ」と篤子が言つた。

「どうして」

「御酒臭いんですもの」

「お酒の匂ひは嫌か」

「飲む人が嫌なのよ」

「ほう、どうして」

「お酒を飲む人は悪い人だから」

「ちや私は悪い人か」

「悪い人だわ」

「ほう」と和尚は皺だらけの頬を膨らました。

「好い事を言つた、此の村中で私を悪人だと言つたのはお前一人ぢや」

其後は微酔の時には篤子に隠れる様にして通過した。

「和尚様でも御嬢ちゃんには一目置くだ」とお濱は村中に誇り廻つた。

夜は洋燈の下で文公や虎公と本を讀んだり四方山の話をする。晝は學校を下がつてから例の山の中腹や、小波寄する岩蔭で遊ぶ、篤子に親しき友が多い中にも文公と虎公は特に親しかつた。

文公は弱虫で凡ての動作がのろ／＼して頭が大きく上に開いて頸が細く、眼が大きいから始終怒つてる様な顔に見えるが、彼は中々怒る様な事はない、何か氣に食はぬ事があると黙つて鬱ぎ込んで眼玉の中央からほろ／＼涙を零すだけである、其癖機嫌の直るのも遅い。之に反して虎公は學校一番の腕力家で去年親父が死ぬ前までは大人並の鐵槌を振て父の合槌をして居たものである、氣が短かくて涙脆くて、痛い事や疲れる事などに掛けては非常の忍耐力がある、彼が大手を振て學校で怒鳴ると他の子供は一言もなく命令に従がふ。

「學問は文公に敵はねえが腕力なら俺に敵ふまい」と虎公が力むと。「腕力があつても學問がなければ駄目だぞ」と文公が言ふ、恚ういふ爭論をしながらも二人は頗る睦ましかつた。

或日三人は濱へ出て遊んだ。虎公は此頃岩と岩との間に堤を築いたり水を引いたり、竈の様な形や三角塔の様な形を泥で捏ね上げて千島や樺太の摸型を造つた。「さあ是れだ、此邊まで行たら鮭でも鱈でも臘虎でも何でも漁れるんだが、俺はもつと奥へ行くんだ。天竺まで行くんだ」と囁し立てる。

「馬鹿、天竺は印度の方だ、北海道の奥なら露西亞か、でなければ北極だ」と文公が笑ふ。

「うむ、北極は此邊か其奴あ面白いや、俺は樺太を止めにして北極にするんだ」密獵者は急に北極探險家に計畫を變更した。其れにはお構なしに文公は例の如く對岸を眺めて考へ込んで居る。



「なあ虎公、俺は不思議でならねえだ、對岸を見てると急に恐かなくなるよ」

「何が恐かねえか」

「對岸の山がよ」

「どうして恐かねえ」

「此方を見てるぢやねえか、恐い眼をして睨んでるせ」

「馬鹿だな」と今度は虎公が笑つた。

「山に眼玉があるもんけ」

「眼玉がなくても此方を睨んでる、屹度山の神様だ」

「山の神様なんてものがあるなら俺あふん捕へて見世物にすらあ」

「お前は強いなあ」と文公は歎息した。而して猶も疑と考へに沈んだ。

「恐い事はないわ」と篤子は急に言ひ出した。

「悪い事をしなければ恐い事は何んにもないわ」

「悪い事つて什麼な事？」と虎公が言ふ。

「泥棒をしたり人殺をしたりする事よ」と篤子が答へる。

「いや其れよりも悪い事があるだ」

と文公が砂の上に腰を下した。

「どんな事だ」

「どんな事つて……俺あ知らねえけど、何でも俺あ本で讀た事がある、人間の身體に善玉と悪玉と二つの玉があるんだ、善玉が光つて來ると悪玉が眞暗になつて了ふし、悪玉が光ると善玉が暗くなる、恰度其れは何だよ、太陽が出ると月が無くなるといふ様なものだ」

「爾かな」と虎公は感服した。「して見ると悪玉は黒いものだね屹度」

「爾よ、屹度爾よ、だから泥棒は夜中に出るもんだわね」と篤子が言ふ。

二人は眞面目な顔して首肯いた。

「其れから其の本に恚う書いてあつたよ」と文公は附加へた。「悪い事にも泥棒や人殺よりもつと悪い事があるんだつて其れは眼に見えない事であるんだとさ」

「眼に見えない事なら善いか悪いか解らねえちやねえか」

「だから俺も不思議に思ふだよ」

三人は同時に小さい首を傾げた。其夜篤子と文公は今日の疑問をお濱に提出した。

「眼に見えないで一番悪い事はね」

とお濱は直ぐに答へた。「嘘を吐く事で」

## 六

冬が来た。屋根／＼は重さうな雪に埋まつて、街道は軒と同じ高さ位の雪の上を踏み固めて一條の路を作る。家から外へ出るには雪の階段を上らねばならぬ。晴れ渡つた日の美しい日には阪路で雪滑りをしたり、紙鳶を飛ばしたりする位のもので、其の他は穴に籠る虫の如く炬燵の上で暮らすばかりである。お濱は二人の子を傍に坐らして此の村に古くから傳はる不思議な話を數限りなく聞かした。阿彌陀山の天狗の話、梵珠ヶ岳の光物の話、油川の里の孝女が死んでから鶴になつたといふ話、久栗坂の婆さんが旅僧を欺した報で盲になり蚯蚓を食つて生きて居たといふ話、其れから海の魔物が茶色の羽で風を煽ぎ出す事や、船幽霊の事や、其れ等を極めて真面目に語るのであつた。而して彼女の話の終りは毎でも教訓的に落ちる。

「人を欺したり虚言を吐いたりすると屹度魔物や妖怪に攫はれて了ふだ」

彼女は二言目には「虚言を吐くな」と言ふ。無學な彼女にも若し家訓といふものがあるなら此の簡単な一句が其れである。此の言葉の中にはお濱が生涯の血と涙が籠つて語る。自分と文太郎を捨て、踪跡を晦ました良人に對する恨が籠つて居る。東京者は皆んな嘘吐きだといふ憤怒が籠つて居る。彼女の天性は卒直で單純で、平素には極めて陽氣である、何か可笑しな事があると奥歯が見える程大きな口を開いて笑ふ、少しでも悲しい事があると四邊構はず泣く。而してお天氣の好い時には聲を張上げて歌を唄ふ。……無論此の土地の人は大抵此那風であるが……兎も角も恚ういふ單純な女が東京者の手に生涯を損せられた時其の驚きと恐怖と悲哀は什麼であつたらう。

篤子の性質は段々乳母に似て來た、彼女は能く笑ひ能く唄ひ能く遊んだ。其れに引替へ文公は段々憂鬱になつた、彼は日曜でも一日いつばい机に向いて本を讀

んで居る、而して折り／＼雪明りの窓を見詰めて考へ深さうに頬杖を突いて居る。四五日虎公の姿が見えなかつた、學校へも出て來ない。と或朝篤子は彼を坂の降り口で見た。

「あら虎公」と彼女は呼び掛けた、虎公は黙つて足元を見詰めて居る。

「どうしたの？ どうして學校へ來ないの？」

「學校なんか……行かれやしないや」と彼は吼える様に齒を露して言つた。

「どうしたの？」

「どうだつて可いやい」

篤子は虎公の權幕に驚いて霎時黙つて居たが、虎公は此の寒さに足袋も穿かず、頭に雪を載せて鼻も耳も眞赤にしてるのを見て急に可愛さうになつて來た、が扱て何を怒つてるのか解らないので子供ながら途方に暮れて足を返した。「晩に遊びに來てね」

此時虎公は眼に充滿の涙を湛めてくるりと横を向いた。篤子は再び立止まつた。

「どうしたの？ お腹が痛いなの？」

「痛かあないやい！」

「誰かと喧嘩をしたの？」

「喧嘩なんかするもんか！」

「ちや何故泣いてるの？」

「泣きやしないやい！」

「ちや什麼したの？ 一緒に學校へ行きませうよ」と手を取りかけると振拂つて再び吼えた。

「行かれやしないやい、腹が空つて歩けないやい」憊う言てわつと泣き出した。

「お腹が空いたの？」と篤子はしげくと虎公の顔を見た。「御飯を食べないの？」

「食ふもんか、昨夜だつて、今朝だつて」

「どうして？」

「錢が無えんだ」

「どうして此處に立つてるの？」

「腹が空つてなんねえから雪の中を走つて見てるんだ、俺なんか弱蟲ぢやねえぞ」篤子は黙つて酸漿の様に頭巾で縛つた小さな頭を傾げたが、不圖思ひ付いて辨當の包を解いた。

「虎公、これを進げるから御食べなさいよ」

「うんにや」と虎公は後退りをした。

「俺なんか弱蟲ぢやねえんだ」

「いゝわよ、食べても可いわよ、私家へ歸つて乳母に拵へて貰ふから」

「女の物なんか食ふもんか」

「女だつて男だつて御飯を食べなけりやお腹が空くわよ」

開いた辨當には鮭の紅に玉子焼の黄色が湯氣立騰る飯の隅に美味さうに詰められて見える。

「ぢや食べやうかな」と彼は漸と辨當を取上げた。「體裁が悪いで俺の面あ見るなよ」

篤子は笑つて横を向いた、と虎公は一口二口食ひ初めたが纏てめそ〜泣き出した。

「どうしたの？」

「俺がね、此處でお前の辨當を食ふだらう、だけれども、お母あや巳之助は昨夜から何も食はねえんだ」

「持て行ておあげなさい」と篤子が言た。

「お前は俺より幼せえだらう、幼せえものから物を貰ふと人が笑はあ」

「可いわよ、だけれどもお辨當箱が無いと私明日困るわ」

二人は種々に考がへた末、到頭飯を篤子の清書紙に包んで行く事に決めた。  
「俺あね、大きくなつたら屹度恩返しをするせ」と虎公は涙を拭き〜言た。

虎公の後姿を見送つて篤子は學校へと急いだ。彼女は虎公が感謝に満ちた眼をして飯の紙包を懐に捻ち込んだ時の顔を思ひ續けて何か知らん大變に善い事をした様な、自分で急に大人にでもなつた様な氣がして心の中は絶えず嬉しさに躍つた。彼は是してゐる中に晝飯の時間になつた。友達は悉く机に並んで辨當を擲げる、其れは學校生活の樂みの一つである。

彼女は例の席に着いたものゝ此時不圖辨當が空虚である事に氣が付いたので悄然と席を離れて火鉢の前に蹲みながら御友達達の食事の濟むのを待つて居た。小さき人々は互に笑つたり噪いだり、お湯を奪り合つたり、お菜を交換したりして居るのを見て居ると、彼女は急に悲しくなつた。其れは空腹じさの爲と今一つは自分だけが除外にされた様な淋しさの爲である。彼女は涙が危なく睫から零れるのを

凝と泳へて火鉢に翳した手を一心に見詰めて居た。其處へ文公がやつて來た。五年級の文公は折り／＼群を脱けて小さき義妹の動靜を見に来る、彼は多くの友の如く飛んだり跳ねたりする事は嫌であつた。

「どうしたんだい嬢ちゃん」と文公は篤子の勝れぬ顔色を見て慰め顔に言た、篤子はしく／＼泣き出した。

「どうしたの？」

「御辨當を食べないの」

「どうして」

「無いの」

「忘れて來たのけ」

「いゝえ虎公に與げたのよ」

「虎公に？彼奴奪たんだらう」

「いゝえ、昨日も今日も御飯を食へないと言つたもんだから私與つたのよ」

文公は例の大きな頭を掉て考へ深さうに言つた。「爾だ、彼奴は貧乏人だから屹度何にも食べられないんだ、だが嬢ちやんお前は善い事をしただ、俺あ今ま丁度爾いふ處を教つてるだよ、慈善といふもんだね、慈といふ字はむづかしくて御前にや讀めないけれども善といふ字は其ら善玉悪玉の善だ、解るだらう、善い事なんだよ、自分の大切な物を人に與るのは辛いけれども善い事なんだよ、お前は豪いな先生に賞められるせ屹度」

「善い事なの？」と篤子は文公に勇氣づけられて今までの悲しさは何處かへ去て了つた。

「俺が考げえるに」と小さな哲學者は靜に言た。「お前の胸の處に善玉が光つてるだね屹度爾だせ、光つてるせ、俺は辨當を食つて了はなきやお前に與るんだが、どうだお腹が空くかね」

「いゝえ、もう何ともないわ」

篤子は急に元との嬉しさに復つて文公と手を別ちお友達の仲間に加はつた。放課時に文公は心配さうな顔をして門に待て居た。而して足駄の齒に介まる雪の溜を自分の足駄に打付けて落してやつたり、頭巾の紐を括つてやつたりした。二人はちら／＼降る雪の中を唄ひ連れて歸つて來た時にお濱は火燧に火を入れて待て居た。

文公は誇り顔に今日の辨當一件を物語つた。

「其れ御覽」とお濱は嬉し涙と涕水とを一緒に前垂に拭いて言た。「文公お前にや迎も嬢ちやんの眞似は出來やしめえ、仍且胤が胤だから」

憊う言てお濱は篤子を抱しめた。篤子の利發な性質を見るにつけ、而して文公の隠鬱な舉動と比較してはお濱は毎も情なく感するのであつた。自分を欺いた東京人の置土産！碌でなしの父！若し子が親に似るものであるなら此の子も什麼せ

碌なものにはならないだらう。彼女は我が子が可愛に付けて其の父に對する恨みを思ふた。

「俺の父様は何處に居るんだい」と文公が訊く事があるとお濱は嘔みつく様に言ふ。「お前の父様なんか地獄へでも追廻くられたんべえ」

「文公は到頭父の事を訊かなくなつた」

「俺あ思ふに」と文公は虎公の事を考へて言つた。「虎公の奴屹度困つてゐるだよ、なあ御母どうかしてやらねえか」

「爾だな、嬢ちやんは什麼お思ひなすつて？」

「何か持て行て與けてねえ乳母」

隣の人に留守を頼んでお濱一家三人は米や味噌、店の堅パン鹽煎餅などを持って虎公の家を訊ねた。

「何しに來たんだ」と虎公は鞆の上に腰を掛けて言つた。

「米を持て來たよ」と文公が言ふ。

「要らねえ」と彼は唇を反らして山犬の様に叫えた。「俺あ男だ、俺あ泣かねえだ」父が死でから一年餘りも埃に任せた鍛冶店は鐵屑や鑄鐵や、竈や鐵鋪、梁から垂れた自在鍵や鞆や尻臺に至るまで、砲彈を受けた殘墨の如く荒れるがまゝに荒れて居る。鞆の横は一間の板の間、障子は開閉するまでもなく、子供の身丈ほどに格もろ共に破れた穴から出入が出来る。皮が剝けて藁ばかりの上に薄い蒲團を敷いて其上に虎公の母と弟の巳之助が横たはつて居る。

「お母は死だ、巳の公も死だ」と虎公は言た。

「どうして？」

「お飯食はねえから死だ」



應て醫者が来る。巡査が来る。醫者の診断に依ると母子共腸窒扶斯であつた。五日前から風邪を引いたと言て居たが、藥嫌の母は弘法様の御符を飲んで醫者にも見せなかつた、病は添寢の巳之吉にも傳染つた、搗て、加へて御粥を啜る事さへ出来ぬ。二人は見す／＼衰弱した。けれども氣丈の母親は虎吉に心配させまい爲に熱に顫へる頭を擧げて笑つて見せた。「明日になつたら癒るだ、心配するなよ」と言續けた。熱のある二人は食慾もなからうが、無病の虎吉は饑じさに苦しんだ。彼は篤子から貰つた辨當を懷にして大急ぎで家へ歸つた。

「お飯があるだよお母あ、玉子焼もあるだよ巳之公、そら是れ見ろ美味さうだぞ、早く食はねえかよ」

恚う言て二人を揺ぶつた。母は片手に藥罐の把手を握り片手に巳之公を抱へた

儘半ば俯伏になつて死んで居た。

「死際に水が飲みたかつたのだらう」とお濱が眼を泣き腫らして言た。

「お念佛を唱へろ、さあお念佛を」

醫者も巡査も篤子も文太郎も御念佛を唱へた。腸窒扶斯といふので巡査は瘤の長春寺和尚の他は村人の入るを禁じた。

母子の死骸は其日の中に火葬に付せられた。其れまで虎公は氣拔けがしたものの如く泣きもせず笑ひもしなかつたが、村人が散々に歸り行くのを見て急に心細くなつて、しく／＼泣いた。

「泣くな虎公」と眠牛和尚は彼の頭を撫でた。「俺の處さ來い、今日から俺の弟子になるだ、なあ可いか」

虎公は黙つて首肯いた。

お濱は二人を伴れて家へ歸つた。晩飯を濟ましてから文公の着古しの着物や足

袋下駄まで揃へてお寺へ出掛けた。

「晩くなるかも知んねえから大人しくして留守をして居ろよ、火の用心を氣を付けてろよ」

お濱が出て行たので二人は俄に淋しくなつた。學校の温習をした、お伽話も讀だ。夜は静である。田舎の十時は都の一時よりも静である。稀には凍り付いた道を歩く人の足音がキチツ／＼と軋る様に聞える許で、隅々から風が襟元に泌み込む。

「外は屹度雪だよ」と文公が言ふ。

「もう歸るわね」と篤子が言ふ。而して二人は雪の中をお濱が提灯を提げてし／＼と歩いて來る姿を想ひやつた。

「どうも不思議だ」と文公は霎時經てから言た。「人は何故に死ぬんだらう」

「爾ね」と篤子も黒目勝の眼を上げて洋燈の方を見た。

「頃日まで生きて居た人が何故に死ぬんだらう、大人は死ぬに決まつてるだが、巳之公は子供ぢやねえか、死ぬほど歳を老て居ねえ」

「お飯を食べないからだわ」

「うんにや爾ぢやねえ、仙人てえ奴は雲を飲で生きてるんだ。お飯食はねえ位で死ぬもんで無えだ、俺あ思ふに是も仍且何かの玉だ」

彼は凡ての疑問を「何かの玉」を以て解釋しやうとして居る。「爾だ鉛筆が減る様に人間の玉が減るんだ、減るのもあれば折れるのもある、まあ爾那なものだ」

「死んでから什麼なるの？」

「其れやお前極樂さ行くのもあるし地獄さ行くのもある」

「恐いわね」

「うん」

「善い人は極樂へ行けるし悪い人は地獄へ行くんだわ」

「うん」

「ちや文公の御父様も極樂に居るわ屹度」

「だがねえ嬢ちやん」と文公は大人の様に腕を叉んで眼を瞬たいた。「俺の御父様は極樂にや居めえよ、屹度地獄だ」

「どうして」

「御父様は善い人でない様だ、仍且何だ、悪い玉の方が光つて居たんだ」  
悄然として恚う言たが篤子の顔を凝と見て

「嬢ちやんは好いなあ、善玉の御父様を持て」

「私、御父様を知らないわ」

「東京に居るだらう、お迎が來たら行くんだ、虎公がお寺さ行て了ふし、嬢ちやんが東京さ行て了ふし、俺にや友達が無くなるだ、爾なると二度とは會はれねえ、なあ嬢ちやん、昨日まで生きてた巳之公だつて今日死んだぢやねえか」

「私東京へなんか行きやしないわ、文公何故其那ことを言ふの？」

「何でも無えだ」と文公は涙ぐむだが「だがねえ嬢ちやん」と霎時經て言足した

「お前と俺とは身分が異ふだでなあ」

「身分て何あに？」

文公が答へやうとした時篤子の下髪に結たりばん諸共小さな頭がこくりと前に動いて林檎の様な頬が火燧蒲團に埋まつたのを見た。

「眠かんべい、お母が晩いだで寝るべいよ」

文公はぐらく半睡の篤子を立たして火燧から寢衣を出して着せてやり、蒲團を敷いて篤子を寝かし、扱て其れから母の寢衣と蒲團を火燧に掛けて火を埋め、篤子の傍に身體を藻潜らした。小さな手と手が互の胸に置かれて、夜具の襟から小坊主頭とお下髪とが二つ並んで親しさうな洋燈の下に見えた。

外では雪がしんくと降り積つて居る。

一日二日は母や弟の事を憶ひ出しては泣いて居たが、虎吉は段々其の悲哀も忘れて了つた。彼は日に三度無事に飯が食へる事が何より嬉しかつた。

「何ちう大食ひな子僧だ」と寺男は毎日呟した。

「今まで食へなかつたのぢやて、食ふだけ食はして置け」と眠牛和尚が言た。けれども虎公をして言はしめば相當に理窟がある。和尚は飯よりも酒が好で、梵妻の婆様は齒が脱けて何も噛めない、其れに今一人の寺男は腰が曲がつて毎も眼脂と涙を湛めてる爺である、何方にした處で一人前の食慾のない人間の仲間と是からずんく伸びて行く生ひ立ち盛りの子供と同見にされて堪つたものでない。其れに飯は麥飯である。

朝に起きて寺の本堂やら座敷の椽やら、何十本となき柱を拭くだけでも二時間

も懸る、其れに使ひ歩き、雪の掃除、寺男の用まで手傳ふと身體が可い加減に疲れもし麥飯腹は力なくなる。

「辛えか小僧」と或日猫が木に登る様な恰好をして柱を拭いてる虎吉を見て和尚は言た。

「辛えなんて事は無えだ」と虎公は海老の様に赤くなつた凍えた手に息を吹き掛けて答へた。

「爾か、お前は好い心掛だ、もう二三日経たらお經を教へてやるぞ」

「お經なんて覺えたくねえや」

「ふうむ」と和尚は頬の瘤の處を膨ました。「其れぢやお前何になる積だ」

「俺あ強い人になるだよ」

「強い人つて什麼な」

「舟さ乗て外國征伐に出掛けるだ」

「うむ、其那事はお前に出来ると思ふかね」

「出来ねえで什麼する、俺あ力があるぜ」

和尚は一寸眉を顰めたが黙つて去て了つた。一と月と経たぬ中に虎吉は徐々退屈になつて來た。和尚と梵妻と寺男、何れを見ても老人許で誰一人相撲の相手になるものもない。初めの中は本堂の阿彌陀様が馬鹿に恐かつた。頭から爪先まで金色で、眼玉のある様な無い様な眼をして立て居る。其の背後の欄間近き棚の上に種々な奇怪な顔をして居る羅漢共が並んで居る。早朝か夕暮の薄暗い時には特に此等の佛像が恐ろしく思はれた。けれども日が経つに従つて段々自分と親しい友達の様な氣がして來る。時には阿彌陀様の脊中に采配を掛けて見る、雑巾で窻と拭いて見る。而して手の届かぬ棚にある羅漢に蜜柑の皮を抛つて見たりする事もある。

「何にも恐い事は無えや、皆んな金で拵えた人形だ」彼は恚う思つた。

退屈に困つては木魚を叩く銅鑼を鳴らす、滑々した板の上で逆立の稽古をする、其度毎に梵妻に叱られた。

「まあ抛つて置け、今に癒るぢや」和尚は恚う言つて妻を宥めた。けれども虎吉の悪戯は仲々止まない、彼は裏山の竹を截て釣竿を作り、使に出る度毎に路行く馬の尻尾を抜いて釣輪を作り、暇を偷んで海へ釣に出掛ける、少しでも獲物があると其れをお濱の家へ持て行た。

「稀にやお魚も食べたかんべえ」と言つてお濱は其れを焼いたり煮たりして彼に食べさせた。

眠牛夫婦が子の如く可愛がつて居る猫があつた、直き近くの村長の黒猫は其れを見初めたかして毎晩の様に通ふて來る。來るは可いが奇妙な聲を出して噛み合つたり、どたんばたん棚のものを落したりするので虎公は頗る癪に障つた、或日件の猫が和尚の大事にしてる急須の口を缺いて逃げて行つた。

「畜生め、殺してやると可いだ」と梵妻が吠やいた。其翌々日虎公は縄で首を縛つた黒猫の死骸をぶら下げて和尚に見せに來た。

「殺つて了つたよ」

和尚夫婦は呆れて顔を見合せた。

「何故殺した」

「大事のものを打毀したちやねえか、悪い事をしたんだから殺しても可いだ」  
元より普通の悪戯ではない、器物の毀れるのを恐れて仕た事ではあるものゝ、  
佛家として殺生を犯す、相手は村長の猫である、此儘では濟まされぬ。

「お前村長様の處さ行て詫言言て來い」

「俺あ頭を下げるのは嫌だ、猫が悪いんちやねえか」

詮方なしに和尚自身で村長へ謝罪りに行た。

「あの小僧めが」と村長の妻は怒つた。家の鶏の嘴を鐵線で縛つて行たのも彼奴

だ、鴛鳥の頭に赤インキを塗り付けたのも彼奴だ、黒門に山水天狗を書いて居たのを見た事もある、雪達摩を入口に轉がして行たのも見た事もある」數へきれぬ程の悪戯を責め立てられて和尚は這々の體で歸つて來た。

「小僧！ 今晚からお菜止めだぞ」

如何なる刑罰よりもお菜止めは虎吉に一番辛い、彼はぶつ／＼言ひながらも服従しないわけには行かなかつた。

意地悪く其日壇家から精進揚を貰つた。三人が膳に向つた時和尚はぢろりと虎吉の顔を見た。

「小僧ッお前はお菜を食ふ事なんねえぞ」

慥う言つた和尚は例ほど酒が進まなかつた、而して精進揚を恨めしさうに見やりながら一箸も付けない。

「和尚様何故御馳走を食べないのかね」と梵妻が言ふ。

「馬鹿な事を吐くな、子供に食はせねえで俺ばかり食へるかよ、お前一人で食べろ」

「途方もねえ事だ、和尚様が食べねえものを私はあ一人で食べられるかよ」

「ぢや仍且小僧に食はせるかね」

「厭だ」と虎吉は吼えた。「俺あ刑罰が済まねえ中は食べねえだ」

三人が睨み合つてる中に精進揚が冷たく洋燈の下に光つて居た。

其夜海は珍らしく荒れて、西風がひゆう／＼裏山を鳴らした。梵妻は早くから火燧に潜り込んで背中を丸くして居眠をし初めた。和尚は經机の上をごと／＼させて居たが麤て虎吉を傍近く呼だ。

「なあ小僧、お前は今年幾歳だ」

「十二です」

「もう年が明けると十三だね、十三といへばもう大人になりかけてる様なものだ、其れにお前は何時まで悪戯ばかりするんだよ、些と考げえて見ろ」

「考げえるつて什麼するだ、俺あ物を考げると頭が痛くてなんねえ」

「其れだもんだて不可え、お前は以後什麼して御飯を食つて行けるかね」

「和尚様が食はして呉らあ」

「私が食はさなげにや」

「困るだ」

「そら困るだんべえ、そこでお前は身を立てる事を考えなげにやなんねえ、何もハア出家になれといふぢやねえだ、外國征伐でも北極探検でも何んても可い、好きな事をするだ、だけんどお前は此儘ぢや逆も豪えものにやなれねえ」

「どうしてだよ和尚様、俺あ是でも力があるだよ學校では一番だよ、喧嘩して負けた事はねえだ」

和尚は瘤の處を靜に掻いて微笑した。學校で一番でも村中で一番でも廣い日本にやお前の様な小僧は何百萬人あるか知れねえだ、世界中での一番にならなげにや豪えとは言はれえ」

「其れや爾だとも和尚様」

和尚は洋燈の心を挑げて人間は智力と腕力と徳力との三つの力がなければ眞の強者とは言はれぬ事や、諸國を行脚して種々な豪い人に會つた事や、東京には大學校があつて其れを卒業すると智力が充分になる事や、難行苦行をすると徳力が増す事や、諸國の風俗、東京の繁華かさなどを語つた。聞く事毎に虎吉は驚いた、彼は土黒い顔に熱氣が溢れて其の眼は好奇の光に燃えた。

「旅をし度えな」と彼は思はず叫んだ。

「馬鹿な事だ、猫を殺したり馬の尻尾を抜いたりするとは違ふぞ」

「旅をし度えな」と彼は再び言た。

「俺あ東京さ行て東京の子供を皆な負かしてやるだ」

「お前に負けるものは一人もありやしねえ、其れにはもつと溫和しくして一生懸命に學問するだ、私の机にある本の一冊も讀める様にならねえぢや何處さも行か



れねえだ、なあ小僧明日からお經を教へるだよ」

「お經なんて詰んねえな」

「勿體ない事を言ふな、お經が能く解る様になれば立派なものだ」

「其れを何とか言たなあ和尚様、爾だ、智慧の力が付くかい」

「お經が解ると徳の力が付くんだ」

「徳の力か、其れも可いけれど俺にや向かねえ、仍且俺は腕の力が可いだ、なあ和尚様、佛様でも力の強い奴があるけえ」

「奴とは何だ」と和尚は口の中で念佛を唱へて。「力の強いのは不動明王だ」

「お不動様か、あの赤え面をして火を背負つてる奴だね」

「罰當りめ」と和尚は再び慌た々しく念佛を唱へた。

一一一

何を考へたものか翌日から虎吉は、神妙に机に向つて字を習ひ又お經を教はつた。幾ら教はつても覚えきれない、同じ處を繰返してゐる中に足が痺れる、眼が眩んで来る。頭は熱い湯氣に圍繞かれた様、其中に涙が睫に滲み出して来る。

「俺あ駄目だ」と彼は言つた。「俺あ什麼しても豪えものにやなれないや」

「怒う言つたものゝ彼は屈しなかつた。折々彼は雪空を眺めては淋しい氣になつたり、又た彼方此方の白い山を眺めては自分があの山を超えるのは何時だらうと思つたりした。彼は和尚が青森へ行くのを見送つて停車場まで行た事がある。「今夜はお通夜で晩くなるから明日の朝歸るぞ」と和尚は言た。而して別れしなに二錢の銅貨を一つ握らして「秘密だぞ」と言た。

汽車が出發してから彼は暫時く停車場を去らずに次の汽車の來るのを見やうと待

て居た。切石を積だ防波堤の上から海が淡い西日に光つて居る。乗降の客ととも  
ない此の小さな驛は入口から腰掛の處まで吹雪が染めて、窓の硝子に涙の様な雫  
が垂れて居た。

「此の次の汽車は何處まで行くだよ」と彼は驛夫に訊いた。竈の様な火鉢に股火  
をして居た驛夫は煩ささうに答へた。

「上野だよ」

「上野で何だ」

「馬鹿な奴だな、東京だ」

「此處から何里あるね」

「まあ二百五十里位だな」

「遠いな」

「汽車賃は何ぼだ」

驛夫は衣匣から切餅を出して火に燻べた。

「四圓と少し」

「高價えな」

「俺の知つた事かよ」

「何時間掛るね」

「まあ二十四時間だ」

「歩いて行つたら？」

「歩けるもんけえ馬鹿野郎」

眞黒に焼けた切餅の灰を拂ふか拂はない中に驛夫はバクリと頬張た儘其處を去  
た。

「歩いたつて行けるだよ」と虎吉はベツと唾を吐いて又た考へ込んだ。

其日の夕方彼は文太郎を訪ねた。學校も冬休になつたので、二人は朝の中に日

課を済ますと、もう夜寝る時まで遊んだり、雑誌を讀んだりして居る。

「虎公、好い處さ來たな、俺お前に見せる本があるだ」と文公は言た。

「本どころで無えだ」と虎吉は大人振た口調で言た。「俺あ種々考げえたよ」

「何を」

「俺はな」と急に小聲になつて「東京さ行くべえ思つてるよ」

「東京？ 和尚様が行けと言たかね」

「うんにや、爾ちやねえけん俺あ何だか急に旅をしたくなつた」

「旅をして什麼するだ」

「そら妖怪を退治るだ、山賊を平げて子分にするだ」

「其那事が出来るもんか、お前子供ちやねえか」

「子供だつて出來ねえ事は無えだ、一寸法師てのは中々強かつたちやねえか」

「お錢が無えだらう」

「うむ、だけん俺あ何も食はねえでも行けるだ、二日や三日位は」

「何故に其那事を考げえだかね」

「俺あ、恚うして居たつて詰んねえだ、俺あ誰にも文句を言はれねえで獨りで好きな事をしてえんだ、爾だらう、親も無えし弟も死んだし俺の様なものは生きて居なくても好い様なものだ、唯だな、和尚様にや世話になつたし、お前やお嬢ちやんやお母あに大恩があるだで御恩返しをしねえではならねえと思ふけん、此村に居たつて窮屈でなんねえ」

「何時行くの？」と篤子は心配相に顔を覗いた。

「何時だか解らねえ」

「和尚様に隠れて行くの」

「まあ爾だな」

「文公、其れは悪い事ぢやないの？」と篤子は文太郎に訊いた、彼女は什麼な事

でも文公に解釋して貰ふのが例である。

「さあ」と文公は眼をぱちくりさして。「爾いふ事は何かの本にも書えてあつたよ、  
獨立といふんだな、悪い事でもあんめえが虎公其れや危ねえよ、東京にや悪い奴  
が山ほど居るだてなあ」

「悪者は打殺して了ふだ」と彼は唇を反らした。

「お母あが居ると好い智慧が出るだがな、今歸るまで待」

「俺あ爾して居られねえだ」憊う言て虎吉は立上がつた。

「明日又た来いよ」と文公が言ふ。

「うむ、だけんど……」と虎吉は口をもぐくさしたが篤子と文公の肩を左右に  
攫んで。「二人とも達者で居てくれろよ、俺あ何處からでも手紙をよこすだて、お  
前達も手紙を呉れろよ」

「妙だなあお前は、今夜行くんちやあるめえ」

「其れや爾だけんど……」何か言はうとしたが彼は喉まで涙が塞つて何も言へ  
なかつた。

其夜お濱母子の寝入ばなを起したものがあつた。其れは寺男の爺であつた。

「子僧子が歸らねえだがお前さんの處へ泊つてゐるでねえかね」

「うんにや」とお濱は寝ながらに頭を擡げた。

「はてね、其れちや何處かへ突走たに違えねえ」

此の聲に驚かされて篤子も文太郎も眼を覺ました。

「東京へ行たんぢやないの？」と篤子は添寝のお濱の襟元を小さな手で弄りながら言つた。

「行たかね、爾だ、行た、屹度行た」と文太郎は言つた。而して眼に涙を湛めて、「俺あ止めろと言たんだけれども……お錢も無えだ、お飯も食べられねえだ」と言ひさして夜具の中に顔をもぐらして了つた。

「可愛さうだわ乳母、虎公を早く連れて来てよ、ねえ乳母早くね」と篤子は泣聲になつた。

雪は降らねど空風が寒い夜半であつた。お濱は寺男と共に出て行た。心當りの處を探し廻つたが少しも手掛がない。

「あの小僧め、碌な事一つ仕出來さねえだ」と爺は膝をかくく、慄はしながら繰返し々々呟した。村人の中で虎吉が停車場にうろくして居たのを見た者があつた。

「汽車に乗たんだ」

「錢が無えちやねえか」

停車場に聞合はせると、半切符を賣た事はないと言ふ。

「魔物に攫はれたのだ」と人々は一決した。

「其那事はないわ」と篤子が言つた。

「虎公は悪い事をしないんだもの」

文公は何も言はなかつた、彼は唯だ友の大膽に敬服もし行先の心配をした。「どうかして歸つて来れば可い」とも思ひ又た「どうか無事で東京へ着いて早く豪い人になれば可い」とも思つた。

翌朝眠牛和尚は青森から歸つて来た。此仔細を聞いて彼は驚きもしなかつた。

「打捨やつて置くだ、彼奴はどうせ此村にや居ねえ童だ」

けれども和尚は直ぐ本堂へ籠つて長い間經を上げて居た、而して虎吉の道中安全の祈禱を捧げた。

此事があつてから篤子と文太郎は急に淋しくなつた、紙鳶を上げるに風向の好い日だとか、村の端で犬が仔を生んだとか、學校の先生から面白い話を聞たとか可笑しい事件や珍らしいものに觸るゝに就け。「虎公が居ると可いのだが」と思ふのであつた。

長い冬も段々去りかけて、雪の穴害に閉籠められた村人が、徐々山へ縁ぎに出る、海へ舟を出す頃になると、雪解水が瀧の如く堰から堰へと落ちて往來は恰がら流れ川の様、氷に鎖された道が少しでも地が見え出すだけでももう春が來たといふ嬉しさに心が躍り出す、堰の間から野蒜や縷草が青い活々とした顔を出し初めると、裏山に木を伐る銜の途絶れゝに鶯の聲も聞ゆる。

篤子は春が好であつた。竹杖を持って雪解道の筋を作つたり、ちよろゝと綺麗な砂を流して行く流れに玩具の柁舟を浮べたり、其頃になると乳母が東京風を自慢で着せてくれる長い袂の付た被布を泥に曳すりながら路の藁を摘んだり、お煙草盆に鼠の尻尾、河童頭に笥頭いろゝのお友達と鬼ごつこをしたり、小鳥の様子に飛んだり跳ねたりして一日を暮らす。友達の中で泥に轉ぶものがあると彼女は自分の長い袂で拭いてやる、玩具を見て欲しさうな顔をするものがあると其れを與れてやる。

「何があつたつて堪りやしない」とお濱は毎も呟すのだが、呟しながらも一種の誇りがあつた。陰気な事は嫌ひで、誰か厭な顔をしてると直ぐ傍へ行つて一言二言言葉を掛ける、すると相手も不思議に機嫌が直つて笑顔をするのが常であつた。

一日遊んで家へ歸ると乳母が鹽に湯を汲んで手足を洗つて呉れる、其れから三人で食事を取掛る。一日彼女は文公と唄ひつれて濱邊から歸つた。

「唯今」と二人は威勢能く言たが返事が無い。と見ると、見慣れない男——立派な姿をした人がお濱の前に坐つて居た。

お濱は泣いて居た。

一三

此の場の光景は幼き二人の胸にも雷事ならず思はれた。客といふのは頭の少し禿げかけた頭が長く身丈の矮い五十恰好の男で其のもの言ふ聲は如何にも和らかに流暢であつた。坐つた傍にインパネスと手提鞆を置いて、言葉の途絶れる度毎に頬を撫でるのが癖である。

何處からの來客かは知らねど、此の村に鱈革の靴を持ちたり金の時計を下げたり又た東京の言葉を使ふ人は無い。恁ういふ客の前には遠慮をするのが至當だと文公は早くも氣が付いた。他に室とてもないので文公は片隅に天神杵を移して洋燈に遠く微明りに雜記帳を擴げて篤子に畫を描いて見せた。

「此のお子さんですね」と男は篤子を見て言つた。

「はい」とお濱はもう泣くのを止めたらしい。

「お嬢ちゃん、此の御客様に御辭儀は？」

「あら私忘れたわ」と篤子は乳母が最早泣いて居ないのに氣が安まつて兩手を小さな口に當て、笑つたが直ぐ丁寧ていねいに手を突いて御辭儀をした。美うつくくしい黒髪くろかみが波なみの様に光つた。

「いやどうも恐れ入ります」と男は慌あはて、膝ひざを直して是も丁寧ていねいにお辭儀をした。其那そのなに禿はげて居ゐないと思つた頭あたまが、腦天なうてんだけが餘あまりにつるりとして居たので篤子あつこは堪たらなく可笑わしくなつて文公ぶんこうの胸先むねさきに顔かほを埋うめた、而そして雜記帳ざつきちやうに「あの人のあたまを御らん」と書いた。「笑ふべからず」と文公ぶんこうが書いた。其間そのあひだお濱はまの深い溜たれ息いきが幾度いくども聞きえた。

「恚こういふ事ことになるだらうとは私既わたくしごとから覺悟かくごをして居ゐました。我儘わがまを言つては濟すみません、元もととく十年じゅうねんの長い間あひだ恚こうして樂らくに暮くらして行いけたのも皆みなんな旦那様だんなさまのお庇かき、お嬢お嬢つやんのお恩おんでござますし、其それに旦那様だんなさまが急病きゅうびやうで被居いやるなら

一目嬢一目嬢ちゃんを御眼ごがんにかけねばなりません、特に大した財産ざいさんをお嬢お嬢つやんに御讓ごりやうりになるといふ大切たいせつの場合ばあひですから何を指さいてもお嬢お嬢ちゃんをお返かへし申まをしませねばなりませんけれども、餘あまり急いそいで私夢わたくしゆめの様ようでございます。どうせ身分みぶんが違ちがひますし、二百里ふたひゃりも離はなれてはもう二度ふたどと御眼ごがんに掛かれや致いたしますまい、明あけて十一じゅういちにおなりになりましたけれども御湯ごとうへ一緒いっしょに入はいりますと今いまだに私の乳ちちを嬉うれしさうに弄いつて被居いやるんですもの、東京とうきやうへ御歸ごかへりになると什麼どんな方が御付添ごつきそになるか知りませんが、暑あつい時とき寒ひやい時ときのお手當てあてや、お顔色かほいろで其日そのひの御氣分ごきぶんを悟さとるなんて事ことは私わたしより他ほかにあらう筈はずがございませぬ、どんなに御不自由ごふじゆうで、どんなにお淋さびしいでせう、私の辛つらい事ことは幾いくらでも辛抱しんぱうが出来できます、お嬢お嬢ちゃんのお辛つらい事ことを思おもひますと其そればかりが、ねえ貴方あなた其そればかりが……」

篤子あつこに覺おぼられまじと咽なび鳴なぐ我聲わがこゑに驚おどいては嘔えずり上げ、嘔えずり上げては身みを慄おそはした。



「御尤もです」と男も例の顔を撫でた手で眼がしらの涙を拭いた。  
篤子は何にも知らずに一心に案山子と鳴子の書を描いて居たが、其鉛筆を取て  
文公は恚う書いた。

「おちよつちやんは此の家に居なくなるんだね」

「どうして？」と篤子も書いた。

「むかひに来たよ」

「だれが」

「東京から、あのハゲ頭が」

「厭だわ」と篤子は鉛筆を捨て、突如叫んだ。而して蟻螂が葉擦れの音に身構へ  
る如く屹と男を睨んだ。

「私東京へなんか行きやしないわ」

「何故ですか」と男は微笑んで篤子の方に膝を向けた。「ねえお嬢様、東京は好い

處ですよ」

「嘘よ、淺蟲の方が好いわ」

「東京の御宅は立派ですよ」

「此の家だつて立派だわ」

「好いお衣服でも玩具でもお人形でも何でも貴方のお好きなものが買って頂きます  
よ」

「其那ものは要らないわ」

「御父様がお待兼ですよ」

「御父様も要らないわ」

恚う言たが彼女は急に不測な危険が我身に迫つたと感付いたものゝ如く、非常  
な速力を以て乳母の胸に縋り付き、「私行かないよ乳母私行かないよ」と讒言の如  
く言ひ續けた。額は火の如く熱かつた。

「申し兼ねますが」とお濱は袴と篤子の顔を我が肌には押し付けて充奮した聲で男に言った。「私も厭でございませう、何と仰やつてもお嬢ちゃんを御返しするのは厭でございませう」

一四

眞實犯すべからざる二人の愛情に男も眼を瞬たいた。

「仕方ありません」と彼は煙管の鴈首を掌に叩いて穩やかに言った。「ぐづぐづしてると手間取る許ですから恚うしませう、どうですお三人御一緒に東京へ御出下すつちや」

「一緒に？」

「えい、まあ其れが一等話が早い、なあに是は私の一存ですけれども東京へ御出下すつたつて決して御迷惑は掛けません、尤も是まで御養育なすつて下すつた御禮に東京見物位は當然の事だと思ひます、えい決して御遠慮なくね」

「ちや乳母と一緒に行くの？」と篤子は未だ半信半疑で乳母の膝に凭れたまゝ顔を上げた。

「えい参りませう、お嬢ちやんの被行やる處なら何處までも乳母は従いて参ります。」

此時文公は初めて口を開いた。「東京へ行たら虎公に會へるだね」

幼さき二人は夕立の過ぎた後の様に急に晴れくとした顔をして笑つた、虎公に會へるだらう、面白い本が澤山あるだらう、豪い人の顔も見られるだらう、二重橋も拜めるだらう、立派な學校、善い先生、お伽話や少年少女の雑誌を作る博文館といふ大きな書店、其等に對して平素遠き異郷として一種の憧憬を有て居たものが俄かに幻燈の火輪車の如く華やかに眼の前に旋轉して二人の頬は微かに紅みを帯びて眼は美しく輝いた。

「もう汽車が無いから」と男は時計を見て「其れでは明日の一時の汽車で」

恚う言て彼は主人に吩咐かつた一封の金包を前に出した。

「私は御禮なぞ戴く理由がありません」とお濱が推し返す中に彼は逃げる様に外

へ出た。中を開いて見ると「金五百圓！」お濱は仰天した。「戴いちや濟まない、本當に濟まない」と彼は繰返し言つた。

三人は枕を並べて床に就いた。篤子は乳母の胸に手を置いて早やすやくと眠つた。文太郎は中々眠れない。彼の空想は彼の大きな頭に充滿に擴がり出した。

而して今まで思ひも寄らなかつた此の境遇の變化が全然新しい圖へ自分を押しやる者がある様に思つた。

氣が付くとお濱も眠つて居ない。

「お母もお前も眠らねえのか」

「眠られねえだよ何だか胸騒ぎがして……其んでも明日は暗い中から起きにやなんねえ、お前も早く眠るだ」

「うん、眠るべえ」

其れから文公も音が無くなつた。お濱は暗い洋燈を見詰めながら再び瞑想に耽

つた。篤子の事、十一年前に淺蟲館に泊まつて途方に暮れた若い男女の事、母は確かに藝妓であつた事、いつか着物や玩具を送つてくれた年に二三度品物や手紙を呉れたが其後音信が無い事、其れからもう十年餘り、あの時には自分も良人の宮吉に捨てられて其日暮らしにも困つて居た事、其れから其れと回想が回想を生むに従つてお濱の頭が奇妙に熱して眼が疲れて居ながら心が眠られぬ。彼女の默想に二つの矛盾があつた。一つは東京が恐ろしい事で、其れを思ふと總身が粟立つ様に慄へるが扱て篤子連れて東京の南家の人々に見せたら什麼に驚きもし喜びもするだらう、容色と言ひ學問と言ひ何處と言て點の打ち處も無いのだから東京にだつて此位のお子は一人もありやしない。慙う思ふと彼女は何時の間にか「厭な東京」を忘れて自分が鼻高々と篤子を入々に見せびらかす時の快心に胸が躍り出す、爾かと思ふと彼女は又文太郎の方を見やつて、彼の父の事を思はずには居られなかつた。「若しも彼奴が東京へ来て居たら什麼しやう、而して此の子に會つ

たら什麼なるだらう、籍は先方に入つてゐるんだから先方に取られて了ふだらう」東京へ行きたい様な、行きたくない様な、自分ながら解らない謎の渦巻の中に彼女は鶏の聲を聞く頃少しとくと眠りかけた。

明くる朝は天氣が好かつた。裏山には小鳥の囀が聞える、海は平で鏡の様、對岸の村々が一樣に旭を浴びて何の家もく此方に向いてゐるかの様、汽船が幾つとなく碇泊して、互ひに汽笛を鳴らして何か合圖をし合つて居る。其れからはずつと離れて帆船が玩具の様に走つて行く。

篤子と文太郎はお濱の邪魔にならぬ様に外へ出て支度の出来るのを待て居た。村人は打連れて手傳に來た。何れも長い別でもあるかの様に名残を惜んだ。最後に眠牛和尚がやつて來た。彼は篤子と文公の頭を撫で眼に涙を湛めて言た。

「慙うなるのは當り前だ、好い鳥は好い山さ飛んで行くものぢや」

小さな停車場は村人で充満になつた、四人が汽車に乗てから人々は田舎者特有

の大きな聲で言った。

「達者で暮らせよう」

「文公手紙をよこすだよ」

「お嬢ちやん浅蟲を忘れるでねえだよ」

「直き歸つてくるわお土産を持って来てよ」と篤子が窓から顔を出して愛くるしい眼を人々に向けた時人々は聲を揃へて笑つた。

一五

汽車に乗て長い旅をするといふ事は篤子にも文太郎にも何れだけ驚異の心を起させたか知れない。乗合の客は可なりに多かつた。特に二等室に乗たといふのでお濱は口癖の様に勿體ない〜と言つた。三人はお役所の腰掛に腰を掛けてるものの如く小さく凝まつて可成く場席を取らぬ様にした。其れに拘はらず例の迎の男——半田友作は澄ましたもので、足長々と寝轉んでる客を起して席を譲らせたり、他人の鞆を網棚の上へ上げさせたりして四人の領土を開拓した。

汽車が段々に進む、いくつかの隧道を潜るともう隣の國になつた。停車場毎に物賣の言葉が少しづつ異つてくるので幼さき二人は次第に「旅」といふ心持になつた。山が見える河が見える、断崖の上の橋を過ぎる時、幾十里の平野を走る時、二人は聲を擧げて囁采した。文公は初めの間は手帳を出して停車場の名を書き記

しなどして居たが何時の間にか其れも倦きて眠り初めた。篤子も眠つた。其後の事は知らない。四人を乗せた汽車は二十四時間を過ぎて上野に着いた。

「此處が上野だ」と聞いた時二人は只だ呆氣に取られて目まぐるしい都の町を眺めた。人力車、自轉車、自働車、電車、其の間を巧に脱け行く人々の敏捷さ、風が吹く度に埃がばつと立つ、霎時は眼も開く事が出来ない、其の埃の中を罵る聲喚く聲、電車の音が蒸し返す様に混雑に響いて頭がぐらくしさう。何の建物も高くて立派で奇麗で人が多くて、何の店も華やかで陽氣で賑かで、而して何の人も皆な多忙さうに見える。山を背後に灣を前に始終眠つてる様な靜な村に育つた二人は一種の恐怖の念に胸を轟ろかした。

「全て喧嘩の様だ」と文公が言た。

「何處から此那に澤山の人が出て来るんでせう」と篤子は言た。

荷物を受取に友作と一緒に出て行たお濱は漸く姿を見せた。

「これから何處へ行くの？」と篤子が訊ねる

「兎も角も宿屋へ」と友作が答へた。

「なあ乳母さん」

「えい、爾しませう」と言ふお濱の顔は苦がり切て居た。

「御父様の御家ぢやないの？」と篤子は重ねて訊く。

「えい、今日だけはね、お嬢ちゃん、私が明日お迎に参りますよ」

四人は車を並べて淡路町の赤羽屋といふ宿に着いた。半田が慰め顔に呶々言置て去た、後でお濱は荷物を解く氣にもなれず茫然室の真中に坐つたが、肩を揺つて苦しさうに言た。

「又た欺された」

翌日お濱は終日半田の來るのを待た、けれども半田の姿が見えなかつた。其翌日の午後お濱は到頭待ちあぐんで獨り出掛けやうとした時に半田の禿頭が見えた。

「どうしたんです」とお濱は浴びせ掛ける様に言た。

「いや什麼も」半田は腰の皮を指先で捻くつて「責は其……若旦那の御病氣が宜しくないのです」

「解つて居ます、急病で被居やると言ふから急いで来たんぢやありませんか」

「其れは爾ですか、私がお國へ參つて居る間に少々模様が變つたものですから」

「變つたんですつて？解つたい、解つたい、俺あ淺蟲さ歸るだ」  
一時に逆上せあげたお濱は東京の言葉を考へ出す暇もなく野生の動物の様に吼え出した。

「其れに就ては乳母さん、此處ではお話し仕悪い事があるんですから……」

「話があるなら此處で聞き申すだ、俺あ東京者の様に嘘を吐くのは嫌だから」

「まあ話を半分聞ただけで怒りつこなしに仕様ぢやありませんか、悪い様にはしません、二三日御待ち下さいよ、つまり事情といふのはねえ乳母さ、」

「旦那が急病だといふのは嘘だといふんでせう」

早合點をしちや不可せん」と半田は膝を進めた。

十一年前に淺蟲の里に篤子を置いて去た南篤彌の一家を讀者諸君にお話せねばならぬ事になつた。

篤彌の父南總五郎といふは生粹の江戸生れで、幼さい時に江戸の瓦解に逢つてから何をしてても成功せず、到頭大道古道具屋まで零落れた。彼は相當の商人に生れて、父の存生中は親類とか友達だとか言つて世話をしてやる事を惜まなかつたが、零落れると襟元に付く者もない。彼の妻は永い間愛宕下の辻の袂に微臭い道具を列べた庭に坐つて居た者だが、息子の篤彌が十二で姉娘のお時が十七の年に只た一晚の中に急病で死んで了つた。冷症が頭に上つたのだと近所の人達が言つた。總五郎は妻に死なれたので大道商を止めて了ひ、曖昧な周旋屋の様な事をして辛

くも三人の口に糊を塗して居た。彼は貧に疲れた、而して世間を呪つた。「俺に背いた奴の面を黄金の延棒で打撲つてやりたい」彼は毎も恚う言つて居た。「金に掛けては友達もなければ親類もない」

然るに幸か不幸か此に一つの椿事が起つた、其頃娘のお時は牛込の某華族家の小間使に上つて居た、折々彼女は眼を泣き腫して家へ歸つた事もあつた。什麼いふ理由かと聞ても口を閉ぢて何にも言はぬ。朋輩喧嘩は止すが可いと總五郎は毎も叱つて歸した。と、爾いふ事が屢々あつた揚句お時は到頭暇を出された。而して翌日家扶が總五郎を訪ねて百圓の包金を渡し、「どうか是で何も彼も穩便にしてくれ」と言つて去た。總五郎は首を傾げた、初めは感謝、次には憤慨、其次には羞耻、近所の人々は噂を立てた。お時は華族家の若様を手玉に取つたのだといふのもあり又た若様でない大殿様だといふものもあつた。

けれども貧苦は其日に迫つて居る。過去を責め立て、金を突返した處が損があ



つて總にならぬと總五郎は思った。彼は黙つてお時に一言も言はなかつた、お時  
も何にも言はなかつた。

「娘の身體を賣た金だ、溝に捨てるか百倍にするか」彼は二三日其ればかりを考  
へて居たが、或日不圖決心して百圓を懐に家を出た。其日の夕方彼は莞爾く  
して景氣よく歸つて來た。

「おい百圓が三百圓になつた」

憊ういふ事は毎日續いた、三年の後、彼は兜町に株式仲買の店を開いた、彼の  
一舉手一投足は同業者の眉を上げさしたり下げさしたりした。彼は築地に數寄を  
疑らした邸宅を新築したのは其れから一年後であつた。新築の祝には著名な人々  
を招待した。

而して其翌日兼て恨に念つた親戚知友を招いた。貧しきものに金を與へた。貧  
しからざるものにも金を與へた。而して一同の驚歎する顔を見て彼は四十年の恨

を晴らした。

「金だ、金だ」と彼は言つた。「金ほど有難いものは無い」

間もなくお時は福永といふ陸軍少佐の許へ嫁入した。嫁入の支度や儀式は華族  
以上の贅澤を盡した。

「此位の事はしてくれても可いわ」

羨む人々の前で遠慮もなく彼女は憊う言つた。實際父が今日百何十萬圓の富は、  
お時の身體から出た百圓の爲めであつたに違ひない。嫁入して後も福永家の勝手  
向費用は凡て南家から支出された。

お時は二人の子を生んだ。長男は琢磨、次は女で環であつた。丁度環の生れた  
翌年即ち篤子が淺蟲の片田舎に生れた年に、お時の良人福永少佐は豪酒の爲に永  
らく腦を病らつて病院で死んだ。

話は篤子の父母の事に移る。彼女の兩親は什麼な人であるか。

一にも金、二にも金！金で侮辱された恨を金で復讐した總五郎は息子の篤彌に對しても旦暮拜金主義を鼓吹した。「人間は讀書が出来さへすれば可い、金を費つて大學を卒業した處が嫌に飯を食はせる事も出来ない様では仕方がない、中學が卒はつたら店の手傳でもするが可い」恚いふ教訓の下に彼は十九の歳から篤彌を株式の仲買店に丁稚同様に使ひ廻した。商人連は首を傾げて感歎した。「流石に苦勞人だけあつて息子に學校を止めさせたのは豪いものだ」

けれども篤彌には其れが堪らない苦痛であつた。彼は金を左程に難有いものとは思へなかつた、彼の身體は虚弱で彼の眼は毎も曇つて居た。出来る事なら基督敎の牧師をして一生を送りたい、是が彼の目的であつた。

彼は朝から晩まで草履の突かけ走りに取引所の間を駆け廻る、其處に集まる人

人の眼は利慾の炎に燃え立て居る、人を倒しても自分が儲けたい、刻一刻に血と涙と總身の熱氣と而してあらゆる残忍な性格を揮ひ立て、うまい汁を吸はうといふ息吹が埃と共に殺氣を帯びて漲ぎつて居る。其の群集の中を潜り抜ける時彼は何時も頭痛を感じた。「僕には此の商賣が向かない」

暇を見ては本を読む、其度毎に父に怒鳴られる。「お前本を讀で商賣が解るかお

い」  
彼は本を讀む事も出来なくなつた。總五郎の拳骨は有名なものであつた。何か叱言を言ふかと思ふと直ぐ拳骨が閃めく、ぐづぐづ説法を聞かすより拳骨を食はすのが一番利目があるとは彼の奉公人及び篤彌に對する教練法であつた。けれども彼に恐ろしいものが二つあつた。

一つは姉嬢お時である。彼は如何に荒くれ立てる時でも又た如何なる多忙な時でもお時の言葉には耳を傾けた、而して必らずお時の言ふ通りになつた。

今一つは彼の喘息病であつた。時候の變り目、其日の天氣模様によつて喘息が起り出すと彼は慌て、築地の本宅へ駆け込み、夜具を被つて大病人の如くうんく唸るのである。喘息が止むと飛び起きて活動する。大酒を煽る、藝者買をする、妻に死なれた後彼は一度後妻を迎へやうとしたがお時の嚴しい反對で沙汰止になつた。其時お時は憊う言た。「私が苦勞して是までにした家を他の者に取られるのは厭です、其代り藝者買なり妾をお置きになるなり其れはお勝手ですわ」父は娘の言を納れた。若い藝者が公然として南家の門を出入した。「此の方が便利で可い」と父は娘に感謝した。

篤彌は父の家庭を見るに付け弱い心が段々弱くなつた。金と女色とを愛する父とは全く反對の方に向た。二十五歳の曉まで花柳の巷へ足を踏み入れた事もなければ、此の社會には普通の猥がましい談話の仲間をば逃げる様に避けて居た。「變り者の息子に變り者が生れた」と人々は噂した。

變り者が或夜何かの忘年會に某藝者と邂逅した。藝者の名は小新であつた。其れは篤彌が幼さい時、母に連れられて愛宕下の大道店に張番をして居た頃、近隣に住んで居た經師屋の娘であつた。此邂逅は小説的に見れば極めて陳腐な事件である。併し陳腐な事件は毎も吾々の上に循環して居る、而して其れが特に著しく吾々に思はせる時に、小説らしい動機が其中に發生して來る。

經師屋の新ちやんが小新になつてゐるのを見た時、篤彌は深い同情に打たれた、二人の小説が段々に進行した。此事を篤彌が姉のお時に打明けた。

「まあ厭だ、藝者なんか家へ引取ると承知しないよ」とお時は言た。話の腰を折られた彼は流石に小新が妊娠してるといふ事を言へなかつた。二人は心を決して逃亡した。而して淺蟲の里に篤子を生み落した。

篤子の生れた頃には二人の路糧は全く盡き果てた、一人は二十六に一人は十九、世なれぬ彼等は途方に暮れた、篤彌は長々と手紙を書いて姉に訴へた。姉の返書は憊うであつた。

「女と手を切て了へ、生れた子供は金を添けて與れてやつて了へ、其れでなければ一文も送らぬ」

憊ういふ強硬な文面では逆も思ふ通になりさうもない、二人は相談の上で姉を偽つて承諾の旨を言送つた。姉から金が届いた。兎も角一旦歸京の上で什麼になるだらうと二人は思つて居た。歸京るや否や二人は厳しく引分けられた、小新は篤彌に通知する暇もなく大阪へ賣飛ばされた。其後何の消息もない。篤彌は失望の餘り病むともなふらしくして日を送つて居たが、氣の弱い彼は父の意に逆

らふ様な事をする事は出来なかつた。彼は姉の勸むるまゝに某商人の娘を妻に迎へた。二人の仲が至極睦まじかつた。

併し其頃からして今まで二月に一度位しきや來なかつたお時が足繁く南家へ通ふ様になつた。數重なるに従つて段々弟嫁の悪口を言ひ出す。「貴方達は只だ遊んで贅澤な生計をして幸福です」といふのを冒頭に抑當南家を起したのは自分の力が九分通である事や、だから塵紙一枚でも髮結錢でも仇や疎略には使へぬ事やを並べ立てる、若夫婦が一室に打解けて笑ひつ話しつする處を見ると彼女は直ぐに言ふ。「家庭の快樂は巫山戯るにあるんぢやありませんよ、暇があるなら刺繡なり造花なりして少しでも慈善事業に御寄附でもなさいね」

時には夜晩くまで饒舌り散らして眠がる二人を困らせ、時には夜明方に襲來して二人の朝寢を咎める。半年と経たない中に嫁は泣きく、實家へ歸つた。

爾かと思ふとお時は、實弟が俄か鰥になつて淋しさうに一室に閉ぢ籠つてるの

を見ると急に氣の毒になつて大騒をする。

「篤さん、私今度こそは屹度好いのを世話して上げるわ」

二三週間は夢中になつて寫眞を取寄せたり身元を調べたり手藝を求めて餘所ながら會ひに行たり、全然熱に浮かされた者の如く騒ぎ廻る。

「何てえ親切な姉さんでせう、いくら骨肉でも彼様は出来ない」と言ふ人もある。此の親切な姉さんの盡力に依て篤彌は二度目の妻を迎へた。二度目の妻は女學校の出身であつたが其れは一年後にお時と大衝突をして随分顔を赧め合た上で行た。

次は三度目、是もお時の盡力であつたが、二年の後に出て行た。十年の間に三人の妻に出られた篤彌は最早妻を迎へまいと決心した。

「一體俺の身體は俺のものだらうか姉のものであらうか」と彼は毎も歎息した。

「南家のものよ」と姉が言た。「此の財産を任せるんだから立派な女でなければ私

安心が出来ないわ」

「其の中に俺は爺になるだらう。」と篤彌は笑つた。彼は最早三十六歳である。彼の健康は次第に衰へて來た、昨年肋膜炎を病らつてから一旦恢復したが此春再び發熱し出した。醫師は悪性の盲腸炎と診斷した。彼は一日く〜と迫り行く我が終りの時に氣が付いた。けれども彼は父や姉に秘して篤子の養育料を送らねばならなかつた。月の晦日近くになると人目を竊んで瘦せ衰へた腕を我が枕の下に突込み皺だらけの財布から二十圓の紙幣を出して小僧の仙七に渡すのが例になつた。小僧の仙七は顔の圓い鼻の低い十五歳にしては身丈が矮さ過ぎるが、伶俐で敏捷くて篤彌の唯一の味方であつた。

或日篤彌は自分の死期の二三日に近づいたのを覺つた。彼は重い頭を上げて父總五郎に歎願した。最期の際の心残は篤子の事である、今まで欺いた罪は深い、死に臨んでの御願である、どうか一目なりと篤子に會はして下さい、出来る事な

ら彼女の里親の生涯を安樂にしてやつて下さらんか。

「可からう」と父は快く承諾した。

「してお前は何か遺言状でも書いて置いたのか」

「あります」

父は霎時黙したが臆て憊う言た。

「子供が東京へ着くまでお時に言ちや不可ぞ」

四

けれども秘密は永く保たるべくもない、急命を帯びて淺蟲の里へ行た半田からは明日午後の一時に上野へ着くといふ電報が來た。不幸にして電報がお時の眼に留まつた。お時は愕然として驚いた。

「半田が何を伴れて來るんです」

「篤彌の娘を伴れて來るのだ」と總五郎が言ふ。

「篤彌に娘のあらう筈がないではございせんか、とつくに他人に與れてやつた積ですわ」

「處が爾ぢやない、單に乳母に預けた許なんだ」

「あら爾でしたか、多分其位の事だらうと私も察しては居ましたが」と言つたものゝお時の顔は一種の憤怒に慄へて居た。彼女は弟を愛して居る、弟

の凡ての秘密、弟の生涯に就ては何事も知らぬ事はないと信じて居た。恐らくは彼女自身も本當に弟を愛し弟に親切であると思つて居るだらう、今まで随分弟の嫁を探し廻つたり父に勧めて弟に多少の財産を譲らせたりした。其れに拘はらず弟が篤子の事を今まで秘して居たのは餘まり水臭い、人を愚弄してる、慥う思ふと持前の痲癩が肚の中で沸り出す。

「其れはまあ其れで可いとして篤彌が何だつて其の子を迎ひにやつたんです」

「俺にも解らんが……多分」と父は娘の顔を読む様に見詰めて。「遺産を渡したいんだらう」

「遺産？ 私生兒に？」

「私生兒でも他人でも遺言なら仕方がない」

「でも藝者の子でせう、其れが本當に篤彌の子なんですか什麼だか解らないではありませんか」

「誰の子だつて篤彌の財産を篤彌が勝手に處分するんだから」  
「幾許位あるの？」

「まあ彼れの名義になつてるのは此處の地所と家屋、二十萬圓位のものだらうね、其他に彼れが貯め込んだものが四五萬圓もあらうか、彼奴は儉約家だからね、公債を大分持つてるらしいよ」

「二十萬圓！ どうして其那に篤彌に譲つたの？」

「お前が俺に勧めたんぢやないか、相場で失敗つた時俺の名義では一文なしになるからつて……」

お時は黙つた、而して二人は霎時奥の室から漏れる皺唄れた力なき咳の聲を聞き澄した。

「もう駄目でせうかね」とお時は愁はしげに言た。

「駄目だ、もう二三日」と總五郎も愁はしげに言ふ。二人は別な事を思つて居る

のである。

「だけれどもねえ御父様」とお時は口を切つた。

「本當に篤彌の子だか何だか解らないものに二十五萬圓も攫つて行かれるのは詰らないわね」

「爾だ」

「貴方と私の財産を看すく他人に盗られる様なものぢやありませんか」

「爾だ」

二人は再び黙つて了つた、春閑はな庭の植込から櫻の花片がちらく散ると、折りく浮雲が椽の硝子戸を暗くしたり明るくしたりする。

「だつて子供には少位の宛てがひ扶持でも澤山ですわ」

「爾いふわけには行かん、遺言状でもあると」

「でも相手が子供ぢやありませんか」

「子供でも後見人が付くから」

「後見人？」とお時は甦生へつた様に眼を睜つた。「爾々後見人が要るんですわね、爾すると私が後見して遺言状を預りますわ」

「其りや不可、俺は親だ、而して男だから俺が保管する積だ」

「貴方の保管では危ないわよ、一つ轉んだら直ぐ融通するでせう」

「爾言へばお前だつて危ないよ、亭主がなくて自分の子供二人でも手に餘つてるんぢやないか」

「構ひません、貴方は先に死ぬんだから弟の後を引受けるのは姉の役目です」

「お前は女だから駄目だよ」

二人は顔を赧らめて争つた。と再び奥の室から篤彌の咳が聞える。

「まだ死にやしないんだ」と總五郎は吾れに返つて言つた。

「あゝ爾でしたね」



死にきらぬ篤彌は夢幻の間にも娘の篤子を今か／＼と待て居る。彼の記憶に遺つて居るのは十一の御下髪姿の篤子でなく、縮緬の涎掛をした嬰兒の時の篤子である。美しい瞳、垂れさうな頬、糸で括つた様な手首！其の面影が死にかけて居る。彼の眼の前にちらついて居る。彼の肉體は既に死んで居る。生きて居るものは只だ篤子に會ひたいといふ神経だけであらう。

其半死半生の病人の咳を聞きながら父と姉は遺産の争論をして居る。丁度其頃は篤子が乳母の膝に凭れて汽車に揺られながら安らかに眠つて居た。

## 五

此の事が決まらない中は篤子もお濱も此家の鬨を跨がせはしないと時子が頑張る、一日二日は其議論に時を費した。半田はお濱等三人の宿と南家とへ幾度となく往復した。お濱は躍起になつて罵しる。「什麼いふ事情があるか知らないけれど遙々親子の名乗をしに出て来たものを一日も二日も恚うして宿屋に抛り込んで置くなんて是だから東京者は薄情だと言ふんだ」と泣聲立て、半田に喰て掛る。半田は弱り切て時子を宥めやうとすると、「私は知らない」といふ。去て總五郎を説き付けやうとすると、總五郎は喘息で困つたまゝ見向もせぬ。兎角して居る中に篤彌は段々人事不省に陥つた。時子は到頭父に妥協を申込んだ。

「二人で後見をする事にしませう」

「其れも可からう」と父も我を折た。而して篤子を呼入れる事にした。

「會はして下さるんですか」とお濱は今までの不平を忘れて喜んだ。「さあお嬢ちゃんお髪を上げませう、御着替遊ばせ、お父様が御待兼で被居やるでせう」前に廻り後に立ち、横から縦から眺める中にもお濱の胸が波を打た。里親が惡いから行儀を知らないと言はれはしまいか、御嬢ちゃんの缺點を探さうと睨んでる人があるはしまいか、正直で生一本で竹を割た様な御氣性で被居やるから無遠慮な物言をなさりはしまいか、心配が次から次へと湧き出して来る。

「ねえ御嬢ちゃん、お邸へ被行つたらお行儀に御氣をお付け遊ばして餘まり何か仰しやらない様にね」

嘴で啣める様に言ふ乳母の顔をにこやかに見成つて篤子は慙う言た。

「だつて乳母、私のお邸ぢやないの？」

「其りや爾でございませう」と乳母は力味出した。「ですけれども今までのお家とは違ひますからねえ」

「どうして違ふの？」

お濱は返事に困つた。片田舎も東京も同じで、築地御殿と呼ばれてゐるお邸も駄菓子屋の古家も同じだと思つて被居やる。慙ういふ調子で何事もなく皆様に可愛がられるだらうか

「乳母が取越苦勞を致しました、どうしても御嬢ちゃんの御好なやうになさいまし、お嬢ちゃんゝの爲さる事には悪い事がございませうまい」

慙う言たものゝ彼女は心の中で一心に子安地藏を念じた。

「俺アは何麼するだね」と壁の隅に閑却された文公は此時漸と口を開いた。

「お前は待てろよ」

「うむ爾か、だけんどお嬢ちゃんも一緒に歸つて来るだかね」

「お嬢ちゃんは當分お邸に残るかも知れないよ」

「うむ、是れきりになるんでなけんにや可いだ」慙う言て文公は顔を窓に向けて

廂から覗く青空を眺めた。

半田と篤子乳母の三人は車を聯ねて南家へと急いだ。篤子の艶々しい髪、蝶々に結んだ紅白格子の大きなりぼん、ふつくりとした頬が餘つて水々しい首筋の左右から見える。お濱は背後から兎角睨めて思はず涙ぐむだ。

「お嬢ちやんを御返し申すのだ、これで私の縁も切れるんだ」

今まで張り詰めた氣が弛むと共に自分が篤子と別れなければならぬ時機が眼前に差迫つて来る事に急に氣が付き出した。「お連れ申さなければ可かつた」と彼女は口の中で繰返した。

車は容赦なく走る。篤子の眼には見る物毎に不思議であつた、美しく飾つた店ばかり並んで賑かな町が引延しの繪草紙の様にゆく先き先きに展開する。大きな建物のある町を越して橋を渡ると間もない處に車が駐まつた。と見ると其處に繼目のない板で作つた屋根のある門がある。前に砂利を敷いて其處に短い柵が繞

らしてある。「此門は飾りものだらう」と篤子は思つた。柵の横に小さな潜り口があつた。其れを開けると滑らかな車の音と鈴の音が聞えた。三人は其れを潜つた。「一寸お待ちなすつて」と半田は一足先に、格子戸の付いた入口から入つて行たが直ぐ出て来て「さあ何卒」と案内した。

「御玄關からでございますか」とお濱は言た。

「いや此方から」

「人を馬鹿にしてる」とお濱がぶつ／＼呟やいた。

「兎も角も此方で御休息なすつて」恚う言つて半田は又もや出て行た。其處は玄關から二室ばかり離れた日本風の小座敷で重に婦人客の應接室に當てゝ居る。

「立派なお邸ですこと」とお濱が言た。「これが御嬢ちやんのお家ですよ、まあお廣くて迷ひさうでございますね」

「だけれども乳母」と篤子は怯れ氣もなく言た。「淺蟲の學校はこれよりもずつと

廣くつてよ」

お濱は思はず頬笑んだ。と見ると半分開いた障子の蔭から幾つもの女の顔が重なり合つて動いて居る。お嬢ちやんを覗きに來たんだとお濱は早くも覺つた。而して肚の中で「奉公人の癖に失禮な」と思つた。

乃へ半田が急ぎ足でやつて來た。

「残念な事を致しました、一足後れました」

「えつ？」

「若旦那は只た今ま」

「お亡くなりになりましたの？」

「はら」

六

長い縁傳ひに一番端れの十疊室、其れが篤彌の病室であつた、篤子とお濱が其處へ入つた時藥の匂ひが微かに流れ渡るを覺えた、先づ篤子の眼に付いたものは廣い座敷の真中に敷かれた眞白の蒲團で、同じく眞白な服を着て居る看護婦が一人室の片隅で何か取片付をして居る。枕元の左に四十恰好——其れでも乳母よりは若くて美しい——の女、右に六十許りの胡麻鹽頭の肥つたお爺さんが見えた。「お伴れ申しました」と半田が言ふのと二人が二人を見下すのと同時であつた。而して二人は更らに一寸眼と眼を見合はせて白け渡つた様な氣色に黙つて了つた。「お前は篤子といふんだね、お前の御父様は死んだよ」とお爺さんが言た。而してお濱に向つて「御苦勞だつた」と簡短に言た。「あゝもうお亡くなりになつて……」

とお濱は挨拶を済ますや否や篤子と共に死人の枕元に寄りほろり／＼と泣き出した。

「まあお變り遊ばしました事……お嬢ちゃん貴方の御父様で被居やいますよ、能くお顔を拜んでお置きなさいまし」

「これが御父様なの？」と篤子は呆れた様に涼しい眼を睜つた。「御父様は死んでるの？」

「えい」

「何故死んだの？」

「……………」

「眠つてるんぢやないの？」

「……………」

「病氣で死んだのだよ」と總五郎が言た。篤子は祖父の方をば見向きもしなかつ

た、不思議さうに首を傾げて再び乳母に問ひかける。

「ねえ乳母、御父様は何時死んだの？」

「たつた今しがた……」

「死なない中に何故私を召でくれなかつたの？」

「御道理でございます、二三日も前から田舎から出て御待ち申して居ましたのにねえお嬢ちゃん、御父様も嘸御残念でございますう」と乳母は腹立たしげに故意と大きな聲で言たが其れも半ばは涙に曇つて了つた。總五郎は黙つて膝に手を置いた。

「此那に急になるとは知らなかつたもんだから」とお時は言譯がましく呟やいたが、聽て優しさうな顔をして篤子に聲を掛けた。

「篤子さん、貴方は御父様に會ひたかつて？」

「えい」

「お父様がお好き？」

篤子は意外といふ様に眼をぱちくりさせて、「好きぢやないわ、だつて今ま初めて御目に掛るんですもの」

「ぢや什麼して御父様に會ひたいの？」

「だつて叔母さん、世界中で一番好いものは御父様と御母様だつて乳母が言ふから……御父様が生きて被居やれば私屹度大好になるんですわ、でも私乳母があるから可いわ、ねえ乳母、淺蟲へ歸りませうね、早く」

乳母は四邊構はず聲を立て泣いた。

「いや歸られん、篤子！是からお前は此のお祖父さんの處に居るんだ」

「此叔母さんも好になつて頂戴ね」

篤子は二人を等分に見廻した。

「えい好になりますわ、お祖父さんはお父様のお父様で叔母さんはお姉さんでせ

う、お父様と乳母の好きな人は私も好よ」

二人は妙に笑つた。

子供だから長座は退屈でもあらう、追悼の客も込み合ふだらうからお時は二人を勧めて別間へ退がらせた。

「十一にしては全然赤ん坊ですわね」

とお時が言ふ。

「田舎育ちだからな、併し中々生意氣な事を言ふ

「でも家の環に比べては……」

「お前の子は利巧だよ、お前に似て……ふうむ」

「御挨拶だわね」

二人は死人の事を忘れて互に厭な顔をして黙つた。と霎時經てお時が言ふ。  
「御父様、御疲れでせうから彼室で御休みになつたら什麼？」

「いや、私は疲れやしない、お前が休むと可い」

「いゝえ、私は是で篤彌と永い別れですから何時迄もお伽をしますわ」

「爾いへば俺だつて親子だからな」

「でも喘息が起ると不可いわ」

「お前は親孝行だ」慙う言て總五郎は室を出た、看護婦も既に去て残るものは只だお時だけである。彼女は一度室を出て父の姿の見えずなるまで見送り、更らに足を返して弟の死骸に寄り添つた。彼女の眼は不安と恐怖と利慾の鬭争に一種の光を帯びて眞白い手が蛇の如く死人の懐に差込まれた。

「何かあつたかね」

突然父の聲が背後から聞えた、彼女は螺旋仕掛の駒鼠の様に背後へ跳ね返つた。

「いゝえ何にも」顔色は死せる弟よりも蒼い。

「爾か、遺言状は？」

慚愧に慄へてるお時を尻目に見遣つて總五郎は遠慮もなく篤彌の身體を調べた。果して何にもなかつた。蒲團の下、枕の下にも一枚の反古すらない。

「俺は確に書いて居たのを見たんだが」と父は首を傾げた。

「巧く言てらつしやる」とお時は疑ひ深さうに父を見詰めた。

父は娘を疑がひ娘は父を疑がひ、果しなき暗闘の中に葬式だけは極めて盛大に執濟しました。位牌を持つ者に就ても種々異議があつたが、篤彌が何時の間にか篤子を庶子に入籍してあつたので、其れには何人も反對する事が出来なかつた。何を思ふたかお時は片時も篤子の傍を離れなかつた。誰より先き篤子の衣服の事に大騒したのはお時であつた。自分の娘の環をば打棄つて先づ篤子を風呂に入れてやる、白粉を付けてやる。髪を結てやる。而して親戚や知人に紹介して廻つた。

「何といふ器量の好い子でせう、田舎で育つた様ではないでせう、私何だか自分の娘の様な氣が致しますのよ」

恚う言て人々の前で篤子に頬摺をして見せたり抱き締めて見せたりした。「幸福

なお嬢さんだ」と篤子を羨む者もあれば又たお時の親切を賞める者もあつた。けれども篤子に取ては其れが苦痛であつた時もあつた。彼女は折り／＼乳母が何處かへ出て行きはしまいかと心細い眼をして室中を見廻すのであつた、而して叔母の際を窺つて乳母の傍へ逃げ歸る。

「其那事では不可せん、お嬢ちやんは皆様に可愛がられる様になさるなければね……乳母も何時までも御側にお添き申して居られる譯のものでもありませんからね」と乳母が沁み／＼と言ふと篤子は鼻をく／＼鳴らして「厭よ／＼」と肩を揺るのであつた。當分人狎のする間だけお濱母子を南家へ引取つて門内の長屋へ住まはせる事になつた、其處は請願巡査の住んで居た家で、二人には廣過ぎる位であつた。篤子は自分の居室よりも文公の室で遊ぶのが好であつた。文公も篤子も其頃から小學校へ通ふ事になつたが、篤子は入學の初から同級の生徒に可愛がられた。其れに反して文公には長い間一人の友達すら出来なかつた。何か物を言ふ



と「やい田舎ッべい」と囃される。「頭でつかち」鈍間坊主「種々な緯名の下に彼は嘲笑された。「虎公が居ると皆な撲つて貰ふんだ」と彼は今更ながら舊友の勇氣を憶うた。彼は益々沈黙になつた、而して放課後には生徒等の罵聲を浴びながら門の蔭に立て篤子の出て来るのを待てる。歸りしなに二人古本屋の前に立て彼れや是やの古雑誌を買ふ事もあつた。東京には好い本が澤山にある、是れが彼の唯一の楽しみであつた。

「今夜讀でやるから飯あ濟んだら来いよ」憊う言て二人は別れる。其頃からしてお時は自分の世帯を疊んで二人の子と共に南家へ移つた。其れも總五郎と烈しい議論の結果であつた。

お時の長男琢磨といふのは今年十五で中學校の一年生である。次は環、これは篤子より一つ年長の十二歳で毎日車で華族女學校の幼稚部へ通ふて居る。凡ての子供は春の草の如く育つた、天の光と地の香に依つ、育たねばならぬ

ものゝ如く自然に育つた。

同じ状態が長く続かなかつた。或日お時はお濱を居室に召で憊う訊ねた。

「妙な事を訊く様だが若しや篤彌が死ぬ前にお前の許へ遺言状を送らなかつたかへ」

「いゝえ存じません」とお濱は答へた、お時は猶ほも疑がひ深さうに凝とお濱の眼を見詰めて、「別に什麼といふ事もないんだけれども遺言状があるなら一日も早く其の手續をしなければ後れると無効になるから」

「では此方の御財産は御嬢様が御相續遊ばすのではないのでございますか」

「だからさ、遺言状がなければ皆な他の人に取られて了ふ譯さね」

「では爾なりますと誰方が」

「爾さね、御隠居さんのものか、でなければ……其れは其れとして本當にお前

は知らないといふんだね、知てるなら早く言ふ方が可いよ」

「存じません」

此の對話があつてから、お時の態度が段々變つて來た。果して遺言状がないとすれば篤子は單に弟の私生兒に過ぎぬ、其れすら藝者の腹から生れたのでは何人の胤か知れたものでない憊う思ふと今まで下にも置かずちやはやした事が馬鹿馬鹿しくも口惜しい。

お濱の眼にも合點行かぬ事が多くなつた、彼女は折り／＼篤子が涙ぐむだ顔をして石燈籠の蔭に立てゐるのを見た、どうかすると女中共と一緒に終ひ風呂へ入れられるといふ事をも聞か、而して篤子が乳母を訪ねる事が次第に疎くなつた。

「お嬢ちゃん近頃は什麼して被來やらないの」と或日彼女は訊いた。

「だつて乳母の許へ行きや不可いといふんだもの」

「誰方が？」

「叔母さんが」

「まあ」とお濱は胸を轟かして。「お嬢ちやんが何か御悪戯をなすつたんでせう」

「うゝん」と彼女は頭を掉たが刷と顔を紅らめて。「私悪い事をしたのよ」

「どんな事？」

「だつてね、學校から歸つた時に間食を下さらないもんだから獨りで残つたお辨當を食べて居たのよ」

「まあ」とお濱は口惜しさの涙を浮べて。「間食を下さらないの？して琢磨さんや環さんは？」

「いつでも貰ふわ」

「ふうん」とお濱は鼻穴を大きくして有りつたけの息を吹いた。「してお嬢ちやんは什麼してお辨當を御残しになるの？」

「不味いんだもの」

お濱は黙つて篤子の辨當を開けて見た。眞白な飯の片隅に梅干二つ、核が見える許りに潰れたまゝ押詰められてある。

「何といふまあくく」とお濱は吾を忘れて辨當を抛り出した。「可うございませう、明日から私がお辨當を入れて進げますから」

「不可いわ、私叱られるから」

「其れや爾だよおつ母、俺の辨當と交換こして學校で食ふべい」と文太郎が言た。

「可いわ」と篤子は二人の同情に幾分か慰められて。「不味いものを食べる事に慣れなきや豪くなれないつて」

「誰方が其那事を言たんです、屹度叔母さんでせう」

「えい、乳母は什麼して其れを知つてるの？」

「大抵解つて居ます、不味いものを食べて豪くなるつてなら御自分の御子達にも爾するが可い」

「でもねえ乳母厄介になつてゐるんだから不味くても仕方が無いわ」

「厄介！」とお濱は吼える様に叫んだ。「其那事まで言てるんですか、厄介になつてゐるのは先方です、此處はお嬢ちやんの御家ぢやございませんか」

乳母の權幕に驚いて篤子は慰め顔に肩に手を掛けて顔を覗き、「乳母、怒つちや厭よ、私悲しくなるから」

乳母は犇と抱しめて頬摺をした。

「俺あ初めつから知てるだ、叔母さんといふ人にや腹の中に悪玉があるだ」と文太郎は大人の様な口調で言た。

九

併し篤子は乳母の言ふ程お時を悪人だと思ふ氣になれなかつた。彼女は今まで人に憎まれた事もなく、憎んだ事もない。だから人の顔色を見るといふ事も知らなければ人間に影日向があるといふ事も知らない。大人の言ふ事は何處までも正しくて、子供は凡て大人の命令に従はねばならぬ。是が彼女の處世觀であつた。けれども彼女に取て合點ゆかぬ事が屢あつた。其中に一番不思議で堪らないのは叔母の御天氣が一日の中に幾度も變る事である。親類其他の來客のある時には、磨よりも環よりも第一に篤子を召で引見はせる。「親が無いので私ばかりを頼りにしてるかと思ふと此の子が可愛さうで」と涙ぐむ様な眼をして胸に引寄せて呉れる。其れに反して來客もなく一人ぼつちの時には篤子が次の室で御人形さんを相手に何か獨言を言つてる時でさへ、「煩さいから彼方へ御出」と怒鳴る。什麼いふ

譯で來客があると私が可愛くて來客が無いと可愛くなくなるんだらう。篤子はこれを不思議に思つた。で、或時これを乳母に訊くと彼女はチエツと舌を鼓らして言つた。

「其れが東京者ですよ」

けれども篤子に其意味が解らなかつた。篤子は本を讀むのが好きで、新刊の雑誌が出る時と眠い眼を擦り／＼讀むのである、滑稽な事が書いてあると獨りでけら笑ひ、悲しい事が書いてあると突伏して泣いて了ふ。篤子の居室は日常の可い八疊の座敷で、環と二人の机を並べ、座蒲團も同じ模様のメリンスで、夜になると床を二つ敷き並べて寝るのであるが、折り／＼環が母の室へ外泊する事がある、環は就寢に何か食べる事と、御眼覺に何か食べる事が例であつた。「お前ばかりに食べさせて篤子に食させない譯に行かないぢやありませんか」とお時が言ふ。「だつて篤ちゃんとは身分が異ひますもの」と環が言ふ。母は黙つて我子の氣高

さに微笑する。「其れぢや私のお室へ御泊りなさい」

併し環の外泊は篤子に取ては幸福であつた、環と一緒に居ると其處ら中雑多なものを擴げて足の立て處もない、其癖手帳でも鉛筆でも算盤や墨や玩具まで取散らかして片付ける事もなく、時には篤子の机の上までも侵害する。奇麗好きな篤子は落膽しながらも丁寧に片付けると、次から次と直ぐに取散らかす。是れも乳母に訊くと屹度東京者だからと言ふたらうと篤子は思つた。彼女は乳母の言た言葉を善意に解釋して居る。而して凡て目新しい事、不思議な事は、好き嫌に拘はらず「東京者だから」といふ一句に適用めて居た。

或夜彼女は少女雑誌を讀で居た。九時が打つと床に就かなければならぬ規定である。此規定に背くとお時は黙つて室に入つて突然に電燈を消すのが常である——但し環の居ない時だけ——篤子は讀みかけた小説の主人公たる少女が繼母に苛められて今ま將さに何人かに救はれさうな處なので時計の進むを知らなかつ

た。彼女の小さな胸が主人公に對する同情で充滿になつた。怵へ様としても涙がほろ／＼出る。と突然障子の開く音がした。

「篤子さん未だ眠ないんですか」と言て入つて來たのはお時である。

「えい只今」

「只今ちやありません幾時だと思つてるんです」

「叔母さん、此の小説が餘まり可愛さうなもんだから」

「まあ小説なんて其那小説を読むなんて」

「だつて叔母さん」と篤子はお時の眼に角が立てるのに一向氣が付かない。「繼母に随分苛められてるわよ」

「繼母ですつて？」

「えい、其りや意地の悪いお母さんよ、自分の子ばかり可愛がつて、富子さんといふ先のお母さんの子を苛めるんですもの」

「お前は其那本を読むんですか」

「でもねえ、叔母さん、繼母は何故繼子を苛めるの？」

お時は答へなかつた、而して凝と篤子の顔を見詰めた。篤子は涼しい眼を一ぱいに開いて一點の邪氣もなく叔母を見上げた。

「ねえ叔母さん、何故苛めるんでせう」

「自分の子でないからです」お時は答へない譯に行かなかつた。

「嘘だわ」と篤子は一言に打消した。

「どうして？」

たつて私は叔母さんの子でないけれども叔母さんが可愛がつて下さるぢやないの？」

お時は胸を突かれて刷と顔を紅めた。

「叔母さんが篤子さんを可愛がつてると思ふの？」

「えい」と答へて一寸首を傾げたが、懸て憊う言た。「だけれどもお客様が被來つた時だけね、東京の人は皆な爾するの？」  
お時は捻らうとした電燈から手を放して黙つて室を出た。

小僧の仙七は兜町の店へやられたり、築地の本宅へ移されたり、始終お時の都合次第で勝手に動かされて居る。彼の綽名はチビであつた、實際彼は十五歳ではあるが、文公と同じ身丈であつた。「餘まり小利巧過ぎるから身體が悪智惠の方に伸びて手足に伸びないのだ」とお時が言た。仙七といふよりもチビの方が通稱になつて居る。彼は鼻端が強く、お饒舌で、人の顔色を見る事が上手である。彼の父はもぐり相場師の一種で穢ない装をして取引所の小路に立つて居たものだが、仙七を残して死んだ、孤子の仙七が路頭に迷うてるのを見て篤彌が救ひ上げて小僧に使つた。是れが彼の南家へ入つた因縁で、篤彌が親にも姉にも秘して養育料の爲替を組まして居たのも是が爲である。

悪口は言ふものゝ彼の利巧なのが、お時の氣に入つた。「家の奉公人で三つの用を

一度に命令かつて満足にして来るものはチビ許だ」とお時は何時も賞めたてた、賞める時には無精に賞め立てる、天下にチビ程の者が無い位に言ふ、一圓や二圓の褒美を躊躇もなく與れる。けれども一寸でも氣に入らぬ事があると、天下にチビ程の悪者、役に立たず、穀潰しが無い様に罵る。いくら利巧でも子供の悲しさは憐ういふ颯風に出會すと頗る面喰つて涙をぼろ／＼零すだけである。其都度「お店 行け」と命せられる。が一週間も立つと仍且チビでなければ用が足りないと言ひ出す。

若し日本にも奴隸制度といふものが残つてあるとすれば、チビの様な奴隸は主人に取てざれだけ徳用か知れない。此の小さな人間の形をした機械がお時の一言に依て朝から晩まで小氣味能く廻轉する。「彼奴は大きくならないのも無理が無いや、彼那に虐使はれちや大きくなる暇がないよ」と番頭の半田が言た。

内と外の用事より他にチビは琢磨の用もせねばならず、環の用もせねばならな

かつた、室の掃除は勿論、靴磨き、買物、追羽子の相手、其れ等は辛抱が出来るとして、若殿様の御徒然の折に相撲の御相手を承はらねばならぬ。是が仙七に何より辛かつた。十二三の時には身丈が矮さくともチビは敏捷であつた。父の存生中には小學校で喧嘩早の副將位に推されて居たので、奉公の初め時分には、蒟蒻人形の様な琢磨を難なく取挫ぐ事は容易であつた。が、チビの生長が止まつてる中に琢磨が段々大きくなる、同じ年ではあるが二つ三つも年が差ふ様、其れに琢磨は學校友達の見様見真似に柔道を始め出した。學校では彼に勝を譲つてくれる者もないので琢磨の爲には甚だ都合が悪い、憫れむべしチビは彼の稽古人形に寛を付けられた。凡そ世の中に何が迷惑だと云つても殿様藝の相手をさせられる程心細い事はあるまい。「さあ来い」と琢磨は身構へる。勝てば後の祟が恐い、勝たなければ柱に頭を打突けられたり、疊で鼻を擦り剝かねばならぬ。双方の難を逃れるには分を取らねばならぬのだが、チビの仙七には出来やう筈がない。彼



は観念して念佛を唱へ、「可うござんすか坊ちゃん」景氣を付けるが聲は陰に慄へて居る。彼は何の邊で轉んだら痛くならうかと先づ軟かさうな場所を考へ、「やつ」といふ掛聲と共に早やころりと轉んで「まゐつた」と疊を叩く。

「其れぢや不可、今のは僕の氣合に負けたんだから今度は氣合を抜きにして、さあ何處でも組んで来い！」

背負投げ腰投げ引倒し、其れにぎゆう、喉を締める事、是だけが琢磨自身で僕の十八番だと言て居る。處が取組の工合で好い鹽梅に件の十八番に應まらないう時がある、又た什麼かすると琢磨の指を痛めたり膝の邊に足の爪を引掛けたりする事がある。此の場合には坊ちゃん氣合以上の聲を出す。

「此奴逆手を使つたな、よしッ覺えて居ろ！」

眼となく鼻となく拳骨が降て来る而して更らに、「新手を教へてやるからもう一丁来い！」

「もう降参ましたから又た明日」恚う言て低頭するものゝ、チビの眼には口惜しさの血が交る涙が、迸り出る時がある。「やいチビが泣いてる」お時や女中達がチビの泣顔を見て嘸し立てる。女の眼から見ると主人と相撲を取て負ける位は何でも無さ相だらうが、チビも男である。人の子である、彼は風呂場の方へ退がつて泣いてる事が度々あつた。

爾いふ時には篤子が心配さうに従いて来て、「何處か痛くしたの？お前は小さいから負けても可いわ」と慰さめるのである、而して自分の貰ひ置の菓子と與れたり、玩具を見せたりする中にチビは何時の間にか元の元氣に恢復するのである。或日南家に一つの波瀾が起つた。

其頃仙七は本願寺の裏塚の下から一頭の子狗を拾つて來た。耳の兩端と尻尾の尖がぼつちりと白い外は何處から何處までも黒く、元より捨犬だから瘡せては居るが、眞圓い惚けた様な眼は晝に描いた様に可愛い。背も腹も泥が粘り着いて毛並が逆立つて居たのを仙七は刷毛を以て丁寧に拭いてやつた。

「まあ可愛いわねえ」と篤子も文太郎と共に手傳つてパンを與つたり牛乳を飲ましたりした。三人は相談の上で「黒」といふ名を付けた。

黒は小さくはあるが生後一年位のもので、拾つた時には跛であつたが、其れも三人の介抱で直ぐ癒つた。仙七が使に出やうとすると彼は直ぐ跳ね起きて一足先に門を出て待て居る。若しも仙七が終日家に居る時には彼は篤子を學校まで送つて行く、學校の歸り時には一丁も先から篤子の姿を認めて矢の如く飛んで來る。

鼻を鳴らす、肩先まで飛び上る、而して篤子の辨當を叩へて御先觸をする。お濱の住居の勝手口に麥酒箱を置いて其れを黒の巢にしてやつた。仙七は暇さへあれば黒を見に來て。種々な藝當を教へた。

實際仙七には黒を可愛がるより他に樂みがなかつた。彼はお時に虐使はれ琢磨に撲られる一日の苦勞を忘れるのは黒と遊ぶ時丈であつた。「此奴は溝に捨てられて腹が減て死にかけて居たんだ、俺も亡くなつた若旦那に拾はれた時は仍且彼様だつたんだ」

恚う言ってお濱をほろりとさせる事もあつた。一日彼は黒に藝をさせながら犬芝居の口上を面白可笑しく述べ立て、人々を笑はして居た。其處へ琢磨がのそりとやつて來た。彼は仙七が人々に喝采されるのを嫉ましく感じた。「どれ僕にもやらせろ」恚う言て黒を抱き上げたが黒は此の氣むづかしやの顔を恐るゝ睨めて耳を窄めたきり動かなかつた。

「乞食犬」と琢磨は鼻先を蹴飛ばした。黒は悲鳴を擧げて片隅に隠れた。  
「あんな犬、あんな犬を飼つて置くに見付かり次第ぶん撲るぞ」と言つて琢磨は引込んだ。

「大變だわねえ」と篤子が言つた。「殺されると可愛さうだわ」

三人が協議の結果、乳母の家に繋いで置、奥庭へは出さぬことにした。けれども犬は元來自由の民である。毎日麥酒箱に蹲んで居られるべきものでない。或日彼は鎖を脱けて庭へ出た。久振で日の光を浴びて陽炎燃ゆる生の上に轉びつ跳ねつ石塊を啣へては吐き出し吐き出しては追掛けつ而して突拍子もない時に宙返りを打て四足を仰向に背中の痒い處を草に擦り付けなどして居た。

と突然只ならぬ息吹が彼の間近に聞えた、次で慌たいしく吼ゆる聲！と見ると椽側に一個の怪物が逆毛を立て居る。此怪物はお時が鍾愛の狎で、黒も屢御目に掛つた事があるので黒自身には少しも驚ろかぬが、戦を挑まれると應せざる

を得ない、彼は敵に悪意があるや否やを確むるもの、如く首を横に傾けたまゝけり、とした顔をして向き合つたが、見れば見る程變な面である、先づ長い毛が總身を蔽うて居る。して見ると餘程暖かであればならぬ筈だが、猶ほ其上に背中に蒲團の様なものを着て居る、人間も肥つて居ながら随分絹布の襲ね着をしたり眞夏の暑いのに外套やインパネスを着てる者があるのだから、狎が蒲團を着る位は黒の眼には左まで奇怪でなかつたかも知れぬ。奇怪と言へば寧ろ其の顔である、陰險らしい鈍い色の眼に絶えず涙を湛めて鼻がいやに平べつたく何處と言つて引締つた犬らしい點が一つもない、胴が太くて脚が短かく、年中疊の上に育つてるか足元が踏跟して居る、併し恚ういふ贅澤な者に特有な性質として嫉妬深く臆病なのは其の啼聲で早くも黒に解つた。「何を吼えてるんだ弱蟲め、犬なら犬らしく外へ出て見ろ、疊の上で威張たつて駄目だよ」と黒は手ん手相手にも思はなかつた。

處が黒が平氣でも狎に取ては一生懸命である。若し人間同士でありながら人種上の憎悪があるものとせば、而して異人種を排斥するのは他の理由があるのでなく單に強者に對する恐怖からだとするれば、狎が黒に對つて吼え蒐るのは其れである。

## 一一一

名狎お玉の方は一步出ては二歩引き、正面から吼えては横に逃足を構へる。黒は庭下駄に頤を載せて眠さうな眼をしながら。「やツかまし」とでも言ふ様に沈着き拂つて居る。と室の中で「玉や」といふお時の聲がした。加勢を得た玉は急に強くなつた。彼女はぐるぐると二三度廻るや否や黒の鼻先目掛けて「ふうッ」と毒氣を吹き掛けた。是れ即ち明かに宣戰の發砲である。黒は一寸躊躇いだか、直ぐ尻尾を押立て耳を硬くして同じく「うゝゝ」と唸ると共に玉の頭に飛び付いた。途端に彼は横さまに軽と倒れた。太い洋杖が彼の脳天を碎ける許に打たので。起直らうとする間もなく琢磨の兩手は早くも彼の兩耳に掛つた、右に藻掻き左に替はしても其の効がない。其の鼻先は踏石の上に擦り付けられる。彼は悲鳴を擧げて情を請うた。此の聲に仙七が真先に走せて來た、次で文太郎、篤子、環。

「あら可愛さうだわ」と篤子は泣聲で叫んだ。

「坊ちゃん勘忍してやつて下さい」と仙七はおろ／＼聲。

けれども琢磨は今ま最も得意の境にあるのだ。彼は下司下郎の野良犬が當家の愛狎に對して無禮を働いたのだから此儘殺しても罪にはならぬと思つた、彼は昔の武者修行者が狷々を退治した様な姿勢を以て、如何に雄々しく自分を見せやうかと努めた。けれども黒は小さけれども眼の上高く差上げる譯には行かない、手を緩めると逃げられる、片手を放せば噛み付かれる。柔道の極意を以てしても施し様もない。慙うなつて來ると仙七よりも犬の方が始末に不可い。

「勘忍して下さい」

「勘忍して下さい」

仙七と篤子が代る／＼言た。黒は兩耳を捉へられ、眼色を變へて苦しがつて居る。

「噛み付かれますよ」と仙七が注意した。

「何？此那奴！今ま僕が三つの拳骨で撲り殺して見せる」

「どうか御願です、御勘辨を願ひます」

謝れば謝る程琢磨は圖に乗た。彼は耳を掴んだ手を刹那に運んで喉元を締めやうとした。黒は一生懸命である、琢磨の手が弛んだと思ふや否や電光石火！身を翻して滑り脱けやうとした、途端に仙七は琢磨の腕を確乎と掴んだ。

「坊ちゃん、私を打ち殺して下さい」

彼の顔は蒼白めて眼が憤怒に燃えて居た。

「何をするんだチビ」

「私を、私を」

「邪魔をするな」と振拂ふ途端に黒は隙に乗じて一目散に逃げ去た。「畜生！」慙う言ふ間もなく琢磨は足を滑らして其處に尻餅を突いた。

「ハ、ハ、ハ」と文公は笑つた。

「黒や〜」と篤子は泣きながら黒の行手を見送つた。

「畜生！貴様は僕を倒しやがつたな」と琢磨は起上つて洋杖を取上げた。

「倒しやしません、貴方がお滑りになつたんです」

「いや貴様が倒したんだ、待て」と琢磨は文公の方を睨み、「誰だ今笑つたのは」

「俺あだよ」と文太郎は静に言た。

「可し、貴様達二人は此處へ並んで立て、今ま僕は處分を加へてやる」

「撲るなら撲るが可いや、さあ撲つて貰ひませう」と仙七は眼玉を霑まして正面に直つた。

「俺は厭だ、撲られる理窟が無え」と文太郎は横を向いた。

「御免なさいね、御免なさい」と篤子は狂氣の如く琢磨の前に立塞がつた。「琢磨さん貴方が無理だわ」

屹と言放つた篤子の言葉が琢磨の耳に入るべくもない。彼は矢庭に篤子を突き退けて仙七の顔を續けさまに打た、あつといふ間もなく仙七の顔は鼻血に塗れた。

「黙いわねえ」聲と共に篤子の手が琢磨の腕を確乎と攫んだ、同時に文公は背後から琢磨の足を取て引倒した。

此の格闘はほんの僅少の間で、お時等が仲に立入る暇もなかつた。

御主人に向て手出しをするなんて不届な奴だ」と人々は仙七を罵つた。

御主人でも悪い方が悪いわよ」と篤子は昂然と言た。而して猶ほも猛り狂ふ琢磨を残して三人が庭を去た。若し此時總五郎が琢磨の首筋を抑へ付けなかつたら、三人は無事では歸されぬ處であつた。

此の一件を聞てお濱は顔色を失つた。「文公お前は飛んでもない事をした。お嬢ちゃんも將來此那事をなすつては不可せんよ」憊う言て慌て、母屋へ謝罪に行た。後で三人は霎時黙つて何となく不安な思に胸を跳らした。と見ると黒は箱の中か

ら首を出して三人の顔を交る／＼に睨めて居る。

「黒や」と仙七は黒の首玉を攫まへてほろ／＼と涙を溢した。「お前は痛かつたらうな、俺も痛かつたよ、そら此通りぶん撲られたんだ、お前は俺に拾はれたばかりで此那酷い目に逢ふんだね、俺だつて爾だ、拾はれて來なけりや此那辛い奉公はして居ないんだ、なあ黒！お前は何處かへ逃げて行け、野良犬になる方が餘程ましだ、俺も其中に出て行くからね、門跡前で待て／＼くれろよ」

泣いては言ひ言ては泣いてる仙七の膝に兩足を乗せて黒は一寸首を傾げて顔を覗いた。

一三

此の一件があつてから、仙七文太郎の二人と琢磨母子とは始終快よからの事のみ多かつた。お濱は人知れず仙七を呼んで田舎風の團子や豆粉を掛けた飯などを食べさせてやつた。「お前さんはもつと大きくならなきやならないんだから、うんと御食べよ」とお濱が言ひ／＼した。彼女は仙七の矮さいのは食が少いからだと思つて居る。恙ういふ風に主人側とお濱の側とは自然に睨み合ふ様になつても拘はらず、篤子は依然として機嫌が可かつた。悪い事は悪いと言ひ善い事は善いと言ふ。學校の歸途には毎も元氣の好い聲で唱歌を歌つて來る。氣苦勞の多い此家の女中達も篤子の顔を見ると微笑ますには居られなかつた。

一日仙七は暇を偷んで文太郎と共に黒犬の箱を掃除して居た。奥にはお濱と半田が秘やかに話して居る聲が聞える。とお濱の聲が段々泣聲になつて來た。二人

は不圖顔を見合はせて耳を敬てた。

「どうしたんだらう」と文太郎が小聲で言ふ。

「俺の事でお叱言かも知れない」と仙七が言ふ。「なあに追出されたつて構はねえ」お濱の泣聲が永く続いた、而して半田は如何にも弱つた様な顔をして出て行た。

「どうしたのおつ母さん」と文太郎は矢庭に走り入た。

「いゝえ何でもないよ」とお濱は屹と唇を噛むだが聽て靜に。「文公、明日から學校をお休みにしてくれ、當分ね」

「いやだなあ」と首を掉たが文公は直ぐ母の顔を見て容易ならぬ事件が起つたのだと覺つたので。「あゝ可いよ」と言直した。

二三日文太郎は留守居をした、お濱は毎日の様に出歩いて夕暮に茫然と歸つて來る。と或朝彼女は文太郎に慙う言た。

「文公、さあ行くんだよ」

「可慮さ？」

「お引越だよ、今日から此家に居られないんだよ」

「御嬢ちやんもかい」と彼は直ぐに問うた。

「お嬢ちやんと一緒に行ける位なら」と言掛けてお濱は歎歎あげた。子供ながら

文太郎は約その事情が解つた。

「仕方がないなあ」と彼は既から諦らめて居たものゝ如く歎息した。お濱は荷作りをしながら事の仔細を蕭やかに語つた。退去の理由は慙うである。

元より乳母を南家へ留め置いたのは當分篤子が家庭に馴れるまでとの約束である、其れが延びくになつては何時まで経ても仕様がな、加之ならず頃日は乳母が後ろ楯になつて居るので、お時にも總五郎にも他の女中にも馴染まぬ、是れでは却つて篤子の利益にも悪い、お時の言ふには篤子は亡弟の忘れ篋であるから自分の娘同様に躰けたい、其れには乳母が邪魔である、どうせ別れなければな



らないものなら今の中に別れて、篤子にも叔母を頼る様に決心された方が可いではないか、文太郎と仙七と一緒にたつて琢磨に逆らふ様では延いてお濱も篤子も憎まれものになつて了ふだらう。

半田の言つた事は是である。お濱は其の中子供に聞かしても差支のない事だけを語つて、扱てこれから國へ歸つた處でお嬢ちやんの事が氣になつて田舎に居られるものでなし、文太郎も學問が好なら出来るだけの教育を受けさせてやりたいから、東京に居て他所ながらお嬢ちやんの生長つを見て居たい、往日南家から貰つた五百圓の金が其儘手も付けずに藏つてあるが其ればかりで寢食が出来ぬ、外の仕事と言つても手馴れないのは危険だからと種々考へた結果、半田の世話で下谷の金杉に養鶏所の古家を借りる事にした、鶏の事なら淺蟲で村長さんの手傳をした事もあるから少しは勝手を知て居る。其他賃仕事をして家賃位は稼げるだらう。

此の話の最中に仙七が口笛を吹きながらやつて來たが、仔細を聞て彼は急に情氣返つた。

「厭だなあ、行て了ふのかなあ、仕方がないなあ、ぢや俺も此家を飛出すんだ」

「お前もか」

「うむ、お前が居なくなれば俺あ此家に居たつて詰らないからな」

「たが仙公」と文公は鹿爪らしく眼をまぢ／＼させて、「お嬢ちやんが残るんだ、

俺達が居なくなるし其れにお前も居なくなつたらお嬢ちやんが心細かんべい、な

あ仙公、お前だけはお嬢ちやんを護つてやつてくれるよ、俺が豪くなつたら什麼

なお禮でもするだ」

「お禮なんか」と仙七は揉消す様に言て溜息を吐いた。「爾しやう、うむ俺亡なつた若旦那にも頼まれたんだからな」

元より是ぞといふ道具があるでなし、荷造りも一二時間の中に済んだ。文太郎は古い雑誌や少年少女小説の中で篤子の好きさうなものは皆な残して行く事にした。終りに彼は一冊の本を出して仙七に見せた。

「これはな仙公、俺にもむづかしくて能くは解らねえけれども、讀でる中に種々な事を考へさせる本だ、是も御嬢ちやんに與げるだで、お前も讀で見ろよ、草の事も獸の事も何でも書いてあるのだが、其れで名前は「一日と一生」と言ふんだよ」

「妙な名前だな」

「是を書いた人は餘程豪え人に違えねえ、俺あもう少し東京辯が出来る様になつたら此人の弟子になる積だ」

「何といふ人だ」

「牛込矢來町三番地、高野修策といふ人だ」

此那話をしてる間にお濱は荷車屋へと出て行つた。「もう此の町も名残だ憊う思ふと流石に胸が押される様、明日からは御嬢ちやんがお一人であの不味いお辨當を提げて此處をお通りになるんだらう、而して詰らないお顔をして此の家を見ては私を憶ひ出しなさるだらう、無斷で移轉した後で什麼なにお泣きになるだらう、麼什なにお恨になるだらう、落膽して御病氣になりはしまいか。憊う思ふと篤子の泣く聲涙の顔氣狂はしく自分を探し廻る態度までが歴然と眼前に浮んで來る。彼女は前垂で顔を隠して心の底から泣いた、此邊に住んでる人が羨ましい、道行く人が羨ましい、往來の立樹敷石家々の軒までが羨ましい、而して凡て近隣の人々に「どうかお嬢ちやんを宜敷御願申します」と言ひ度くなつた。

車屋から歸りに彼女は不圖氣が變つた。「いくら何でも此儘別れるのは厭だ、せ

めて一目、たつた一目でも他所ながらお顔を見て来やう、誰が何と言つたつて構やしない、私が十一までお育て申したんだ、私の所有だ、爾だ構やしない」彼女は何物かに反抗する様な心持で口の中で言た。彼女は急ぎ足で學校へ行た。

學校は今ま正午の休み時間である。三方に建てられた教室に挟まれた真中は廣庭で砂利が奇麗に敷かれてある。砂利の上には數限りもなく生徒が遊んで居る。只だわあ〜言ふ數十數百の可愛らしい聲が晩春の暖かい日光の中に漲ぎつて、走るもの轉ぶもの帽子を高く飛ばすもの器械體操をするもの、角力を取るもの、喧嘩をするもの、恰からに狎兒の如く砂利の上に寝轉びつ坐りつ男生徒は流石に亂暴である。其の眼まぐるしい小英雄等の群を離れて、女は女に春日隈なき軒の下にべたんこに坐つて御手玉を取て居る。

「山王のお猿さまは赤いお衣服が大おう好き……」

お嬢ちゃんだと乳母は思はず微笑んだ、紡績ではあるが荒い飛白に海老茶の袴

を穿いて長い袂を邪魔にしながら上を見ては下を見る玉の行方に涼しい眼を動かして、ほつと汗ばむ許兩頬を林檎の様に染めて居る、ふさ〜とした髪が漆の様に光つて其れが眞白い襟元に對照能く、赤い半襟を漏れる胸元の肉付、喉の豊よかさ、お濱は矢庭に抱き付いて思ふ様頬摺をしてやりたいと思つた。

「仍且お嬢ちゃんが一番御容色が好くて被居やる、あのまあ御品の好い事、眼と眉とお鼻とお口元と御可愛い事、まあ御召物だつてお嬢ちゃんがお召になると紡績の様でないのは不思議だ、あ、御手玉をお落しになつた、あらお口にお手々を當て、笑つて居らつしやる、ホ、ホ、」

釣り込まれてお濱も笑つたが、忽ち彼女の胸を衝いたものがある。「笑つて被居る〜」と彼女は繰返した。

「笑つて被居やる……何にも御存知なくて」

涙が留度なく落ちしきる、彼女は門の柵にしがみ付いて涙を泳へた、と御手玉

に倦きた一群は直きお濱の前にある遊動木に駆け集まつた。

「南さんが一番よく」と皆々が言た。お嬢ちやんが皆に可愛がられてるんだと乳母は思つた。眼前に乳母が居るとも知らずに篤子は得意になつて遊動木に乗た、大きな丸太棒が前後に動くと、篤子は調子を取て巧に歩く。

「まあ御轉婆な」と乳母は悲しい中にも微笑した。と什麼いふ機會か篤子は身體の中心を失つてばかりと倒れた。

「あゝ危ない」吾を忘れて乳母は其處へ出た。

一五

「御怪我をなさいませんでしたか」

篤子は抱き起されて平氣に乳母を睨め袴の泥を叩かせながら。「何でもないわ、乳母は什麼して此處へ来たの？」

什麼して来たと言はれてお濱は急に悲しくなつた。「いゝえ、あのね乳母は只今此處を通りましたから」

「爾？乳母今日の御辨當は美味かつてよ、明日もお卵にしてね」

「はい」と言たが明日のお辨當は誰がしてくれるだらう、お濱は何にも言へなくなつた。而して彼女は篤子の草履の鼻緒が切れたのを見て其れを手しながら篤子を自分の肩に凭らした。他の子供達はお濱を見て遠慮さうに遠く離れた。

「ねえお嬢ちやん」とお濱は懐から紙を出し其れを小絢に捻り初た。

「お嬢ちゃんはお幾歳でしたっけね」

「十一よ」と篤子は笑つた。「乳母は知てるぢやないの？」

「爾ですわね、乳母は年を老りましたから全然忘れてしまひましたよ……十一—爾—十一におなり遊ばすまで」

恚う言ひ掛けてお濱は急に俯向いて了つた。

「鼻緒は未だなの？」と篤子は狎へる様に鼻聲で言ふ。

「えい只今、直さでございますよ」

彼女は涙に濡れた紙片を捨て、新たに再び緋り出した。

「でもお十一におなり遊ばすとね、乳母が御傍に居りませんでもお嬢ちゃんは溫和しく遊ばしてね、皆様に可愛がられる様にね……」

「皆が私を可愛がつてくれるわ」

「爾ですとも、誰だつてお嬢ちゃんを可愛がつて下さいますわ、けれども若し乳

母が居なくなりましたら」

「何を言てるの？」と篤子はませた調子で乳母の肩を弄りながら言つた。「乳母が

私の處に居なくなるなんて事は無いぢやないの、來年も其の次の來年も、其次も十も二十も三十の來年も私と文ちゃんと乳母と一緒にだつて言たぢやないの？」

「其りや爾ですとも」とお濱は釣込まれて言た。

「乳母は何故其那事を言ふの？」

「何でもございませせん」

「爾？乳母は何處かへ行くんぢやないの？」

流石に乳母の萎れた顔を見て小さき胸にも不安の雲が湧いた。

「何處へも参りやしません」

「爾？何處へ行ても直ぐ歸つて來るわね、是から御使に行くの？」

「はい」

「遠い處？」

「はい、随分……」

「でも私學校から退ける時には歸つてゐるわね、お人形さんの衣服を縫つて頂戴よ」

「はい」

「其れから南京玉と針と糸とを揃へて置いて」

「はい」

「黒犬に與るビスケットを買て置いて」

「はい」

「草履は？」

「もう宜しうございます」

鼻緒を上げた草履を手を添へて穿かせたがお濱は顔を上げる事が出来なかつた。鐘が鳴る、生徒達は棟木に飛び込む鳩の如く、輝やく砂利を蹴立て、教室へ

駆け込んだ。

「ぢや可いの？お人形の着物と南京玉よ忘れちや厭よ」

篤子は乳母の手を潜り抜ける様に走り去た。美しいお下髪が滑らかに光つて、りぼんの蝶々が跳つて行く。乳母は砂利の上に膝を落したまゝ前掛を顔に當て、泣いた。

「何んにも御存知ないのだ」

去るものには悲哀の覺悟がある、知らずに遺されたものゝ悲哀を思ふと、我が

悲しみよりも更らに深い。

お濱は遂に南家を去た。お人形の着物と南京玉とビスケット、其れから文公の残した數冊の古本を仙七に託して。

仙七は空家になつたお濱の住居に鞆然と坐つて居た。而して見送りもせず荷車の音が次第に遠ざかるを聞て居た。音が聞えずなると差替つて篤子の唄ふ聲が聞

える。晴れくとした半ば狎へる様な半ば大人を真似る様な透徹る聲!

「疎末にすなと母上の、仰せ給ひし此人形、着物を着せて帯しめて箱の御殿に坐らせん。着物は緑帯は赤、模様は松にこぼれ梅。泣くなよ泣くな御休みの、口には花見に伴れ行かん」

「お嬢ちやんが御歸りだ」と仙七は茫然と思つた。

「左様なら」と御友達に挨拶する聲と共に門に入る足音! 次で元氣好く「乳母只今!」と聲をかける。例もならば乳母が慌て、迎に出るのだが、家の中は聞として音がない。篤子は不思議さうに家の中を覗いた。

「乳母! 只今!」

と見ると家は只ならぬ變り様である。入口に一足の下駄もなければ勝手口にも道具もない。

「乳母!」と彼女は不安に叫んだが、此時既に家内の凡てを知つた。

「乳母! 乳母! 乳母!」

彼女は入口から入つて狂氣の如く走り廻り更らに勝手口を駆け抜けて叫び續けた。

「乳母! 乳母!」

「誰も居ません」と仙七は氣拔がした様に言つた。彼は仍且薄暗い室の隅に坐つて居たのである。

「どうしたの? 乳母は? 文ちやんは?」

「引越しました」

「何處へ?」

「金杉といふ處へ」

「嘘よく〜」と篤子は身體を慄はした。

「嘘ちやありません、お人形と南京玉と此の本とを貴方に進げてくれつと置いて

行きました」

「要らない〜要らない」と篤子は人形も南京玉も抛り出して泣き出した。

「泣いちゃ不可せん」と仙七は慰め顔に言た。

「乳母〜〜」

篤子は辨當と學校包の上に突伏した。「泣いちゃ不可せん」と仙七は再び静かに繰返したが、急に怖へきれなくなつて是もしく〜泣き出した。

「お嬢様、私も泣きたくなつて來ました」

表には學校歸りの女の子等が唄ひつれて行く。

「あばれる鼠じやれる猫、人形の家をやぶるなよ、學校すみて歸るまで、まてや我身をおとなしく」

## 光と暗

四五日の間篤子はお濱の事を思ひ出しては泣き泣いては碌々食事も進まなかつた。或時彼女は黒犬の蚤を取てる仙七に憊う訊ねた。

「乳母はもう來ないの？」

「さあ」と仙七は暗い顔をして、「中々來ないでせう」

「ぢや仙七、私を乳母の處へ連れて行て頂戴ね」

「私も爾思ひますがね、考へて見ると其れは不可ませんや」

「どうして？」

「乳母さんがね、私が御訪ねするまでは御嬢様をお連れ申しては不可いつて私に



頼んで行つたんですからな」

「何故不可いの？」

「其れはね、私にも解らないのです、大人のする事だから」

仙七は自分の身體は凡て大人の手に支配されてる者だと思つて居る、彼は大人の命令には絶対に服従しなければならぬ、而して大人の爲る事には疑問を起したり苦情を言たりする事が出来ぬものである、子供は大人の奴隷であるが其代りに自分が大人になれば總ゆる疑問や束縛が釋然と解けて什麼な我儘でも出来るものだと思つて居る。彼は一日も早く大人になりたいと思つて居る。

「大人になつたら乳母に會へて？」

「爾ですとも、私が二十になつたらお嬢さんと一緒に此家を飛び出しまさあ」此那對話でも篤子には唯一の氣慰めであつた。

お濱が去てからお時の態度は又もや變つた。彼女は淋しからうと言つては篤子を

自分の室に寝さしたり、可愛さうだと言つて淺草や上野或は芝居などへ連れて行

た。  
「ねえ篤子、何でも好きなものがあつたら爾お言ひ」

人形も買ってやる、玩具も買ってやる、彼女は環同様に舐める様に可愛がつた。其れを見る度に總五郎は鼻先で笑つた。

「ふうん、何か考へやがつたと見えて馬鹿に手馴づけてやがる」

或夜、總五郎は打つけに慙う言た。

「お時お前は頃日篤子に風向が好いね」

「何を仰やるの？」

「いや篤子が可愛いかといふのだ」

「其りや可愛くないければ此那世話が出来ませんよ」

「はてな」と總五郎は擲擲ふ様に首を傾げた。

「若し篤子に財産が無かつたら什麼だ」

お時は閃りと眉を動かした。「篤子には財産が無いぢやありませんか、遺言状さへ無いんですもの」

「ハ、爾かね、其れぢやお前は素寒貧の孤兒を可愛がつてるんだね、俺よりも餘程人情深えや、俺は篤子でも琢磨でも環でも些とも可愛とは思はねえ、煩さくて仕様が無え」

「貴方の可愛いのはお金でせう」

「まあ爾だね」

とは言ふものの總五郎は始終篤子に對する注意を怠らなかつた。時としてお時は矢も楯も堪らなく篤子を憎む事がある、篤子は膝から抛り出された猫の如く小さくなつて、不思議さうに叔母の顔を睨めて居る。爾いふ時に總五郎は莞爾として篤子の頭を撫でる。

うだ、御祖父さんの御室へ來んか」

室へ行て總五郎は種々な菓子と菓子を與る、偶には銀貨の光つたのを握らせる。彼は子供の喜ぶものは食物とお錢ばかりだと思つて居る。

「どうだ、御祖父さんが好きか」

「えい好きよ」

「叔母さんと何方が好きだ」

「兩方！」

「なに？兩方？同格かな」と彼は不満さうに言て。「ぢやお前一等好きなのは誰か？」

「乳母！」と篤子は立どころに答へる。

「其れから？」

「文公と虎公、仙七」

「虎公つて何」

「鍛冶屋の虎公、強いわよ、御祖父さんは知らないの？二日も御飯を食べないけれどもお腹が空かないのよ」

虎公の話は總五郎に何の興味もなかつた。

「其れから好きなのは？」

「其れからね、痰瘤の和尚さん」

「ふうむ」

「其れから御祖父さんと叔母さん」

「ふうむ」と總五郎は驚いた。乳母に文公に虎公に仙七に和尚！して見ると自分は漸と六番目位の好きな人にされて居るのだ。

「其れも可からう……併しお前は叔母さんより御祖父さんが好きにならなければならぬぞ」

「其りや困るわ」と篤子はいかにも當惑さうに言た。  
「何故だ」

「叔母さんがお祖父さんよりも叔母さんが好になれと言ふんですもの」

「彼奴め先潜りをしやがつた」と總五郎は舌打した。

多くの人に愛せらるるのが人間の最大幸福だとすれば篤子の今の境遇は其れである。御祖父さんと叔母さんが競争で可愛がつてくれる。而して互に如何にして篤子の心を惹付けやうかと苦心して居る。

お時は今年三十九、色白なので五つ六つも若く見えるが、身装は可成く地味に扮つて居る。實際身装に就て八釜しいのは此の界限の貴婦人間で一二を争ふ位だと女中達が言つて居る。家にある時は重に大島で稀に派手な縞お召位を着るが、外へ出る時には人目に立つ様な立たない様な假令ば紺地に薄茶縞の着物に鐵色の共縞お召のコート、其れに白茶に細金入りの帯、是れが彼女の得意の身装であつた。「高尚でなければ不可い」と彼女は口癖に言た。爾かと思ふと彼女の持物は極めて仰山なもので、帯の間、胸元、頭、指は毎もイルミネーションの様に金光燦

爛として居る。或時總五郎は憊う言て笑つた。

「お前は着物だけは高尚がつても其の金びかで全然打毀して了ふね」

「私黄金のものが身體に付いて居ないと心淋しいんですもの」

「什麼見ても成金の後家さんだね」

「どうせ成金ぢやありませんか、貴方の子ですからね」

憊ういふ衝突は屢あつた。彼女は純粹の金や寶石が好きならばかりでなく、賈物をも好である。買物が最も自慢で、何處の店へ行ても値切らなければ氣が濟まぬ。環の着物は太抵お時自身が小さな店から買て來たものである。彼女は女中を呼集めて風呂敷包を解く。

「什麼だいは是れは？大島の本ものに見えるだらう、これで幾何だと思ふえ、是れはお召、觸て見て御覽、そら場違ものとは見えないだらう、そら此のダイヤ、これはお前達には解るまいね」

女中共は返事に困つて何でも無茶苦茶に賞めそやすと、彼女は益得意になつて言ふ。

「何でもね、三越や白木で買ふより小さな店の方が好いものがあるよ」

「賈ものを澤山買ふより本物を一枚買ふ方が可いちやないか」と總五郎は又しても横槍を入れると彼女は頗る機嫌が悪い。

「着物は人に依るんですよ、私や環が着ると賈でも本ものに見えますよ」

「成程中々高尚な心掛だ」

或日お時は總五郎に恚う言た、「篤子も環も徐々遊藝を仕込みませぬではね」

「何故だ」

「女の道ですもの」

「遊藝をやると嫁になつてから何れだけの徳がある」

「損徳ぢやありませんよ、上流の娘は其位の事を仕込まなければ肩身が狭うござ

いますから」

「ふうむ、仍旦世間體の爲めだね、其れで師匠を家へ召ぶのか」

「えい」

「この師匠も仍旦賈物で間に合はす譯には行かんかね」

お時は答へなかつた。

「俺の家は段々成金臭くなる」と總五郎はぶつ／＼言た。

篤子と環は急に忙しくなつた。三味線に琴、踊、生花、茶の湯。學校から歸つても遊ぶ暇もない。此の道に掛けては篤子は頗る無器用であつた。先づ篤子の嫌なのは三味線と琴であつた。此の刺戟的な單調な音樂を聞くと彼は總身に粟が立つ程悪感を催さずには居られなかつた。其れに反して環は先天的に器用である。

何故三味線や踊を覚えなければならぬのだらう。篤子は毎も此の疑問を有て居た。三味線や踊！其那ものより篤子は學校の唱歌が好きである、暖かい和らかな春の様な風琴の音が好きである。學校の廣庭で又は遠足の郊外に有りつたけの聲を出して唄ふ時は何にかしら自然に對する感謝の情が胸一ぱいに溢れる様な氣がする。彼女は淺蟲の海岸で岩から岩、島から島、舟から陸へと走り廻つて居た時には唄ふまいとしても大きな聲が何時の間にか出たものだ。其れに反して室の中に座つて三味線を持つと、身體も喉も壓へ付けられて了ふ。

「私他の事なら何でもしますから三味線と踊だけは止めさして頂戴ね」  
と彼女は叔母に言た。

「藝事を知らないで什麼するもんです、其那風だからお前は下品なのです」とお時

が言ふ。什麼いふ事が上品で什麼いふ事が下品であるかは篤子に分らない、お時の説に依れば長唄は常盤津より上品で、藤間は花柳より上品だといふ。「上流の家では大抵長唄に藤間だ」上流で流行るものは上品なのだと彼女は思つて居る。偶に篤子が唱歌を唄ふとお時は眉根を寄せて言ふ。「女は爾那に大聲を出すものぢやありません」併し三味線の時にはもつと大きな聲を出せと叱り立てる。篤子には其れも解らなかつた。

先づ三味線を膝に載せる、小さな膝は此の長い柄の付いた重い物を容るゝ餘地がない、齋足と言って右の足を横に出して脛の横に三味線の胴を置く、而して天心を肩に昇ぐ様にして上に捧げる。爾しなれば手が届かない、其れだけでも充分に窮屈なのに撥といふ奴が小指に喰ひ込んで肉を撈る様に刺す、同時に左手の絃爪が絃に擦れて裂けさうに痛い。恚うなつて來ると彼女の小さな身體と弱い力は三味線を支へる事すら困難しい。少しでも軽くなる様にと撥の先を持つと。「横着し

「ちや不可せん」と叱られる。棹を握る手は拇指が段々曲がつて来る。「指を反らし  
て」憊う可てお時はぐいと拇指を痛い程に推して反らせる。左右両手の苦難に加  
へて、例の鳶足が徐々痺がきれ初める。首が疲れてがくりと低れて来る。  
「顔を上げて、大きな聲で」

叱られながらも最早忍耐の力もない。篤子は半ば泣聲に唄ふ。

「禿々と澤山さうに、言うて下んすなこちや花魁に、戀の諸分や手管のわけも：  
……」

唄ふ處は酒の香と肉の色とに充ちた淫猥な辭句、篤子には何の意味か少しも解  
らぬ、篤子に解らぬがお時に解つて居るかも知れぬ。解らぬながらも篤子は唄は  
ねばならぬ。

篤子が漸々濟むと環が器用にやつてのける。彼女は手習子が得意である。

「言はず語らぬ我が心、亂れし髪の亂るるも情ないは只だ移り氣な、どうでも男

は悪性もの」

此處まで來るとお時は環の聲に聞き惚れながら眼を細めて首肯するのである。

「まあ好い文句だね、上品だよ本當に」

踊の稽古は更らに辛かつた。唄と三味線に合はして足を運び手を振る。其上に其れく眼を配らねばならぬ。田舎で自由に野馬の如く育つた彼女は腰を窄め肩を殺し首を伸ばし足を内輪にする事は窮屈此上もない。足を和らかに出せば手の方を忘れる、拇指を離す、手を動かせば眼が御留守になる。

第一に篤子の眼は環の様に自由自在の使ひ分が出来なかつた。平素でも篤子の眼はばつちりと黒眼勝の何處までも幼々しく、人形の瞳の様に澄渡つた眼であるが、横眼をしたり媚を含んだりする事は出来ない、彼女は人を見るにも凝と真直に顔を向ける性質であつた。其れに反して環の眼は極めて活動的であつた。少し眼尻が下がつて茶色ではあるが、睫毛長く瞳の底に露を宿して嬉しい時には少し上眼使ひの如何にも樂さうな色を見せる。怒つた時には下がつた眼尻がきりりと

上がる。狎へる時には謎の様に和らかい光を帯びる。此の表情に自在な眼は巧に遙に應用せられた。賞められる毎に環の藝が進む、叱られる毎に篤子は硬くなる。「歳がたつた一つ差なのに、篤子は什麼して恚う不器用なんだらう」とお時が言ふ。

「什麼も環さんの方が藝事にお生れなすつた様に御器用で被居やいますから篤子さんの方が目立て見えるのでございますよ」と師匠が言ふ。お時は毎も満足氣に首肯いた。

或學者は子供の知識は競争心に依て進むのだと言ふ。又た或る論者は人間は競争に依て生きて居るものだと言ふ。女の兒でも競争の心は幼さい時から有て居る。況してたつた齡が一つ差ひ、朝から晩まで、行儀から作法から箸の上げ下しから糶賣の様には行かない。大人に賞められるといふ事は小兒に取て無上の光榮である。



此の一言の光榮を得るために小兒は言ひたい事動きたい事食べたい事泣きたい事笑ひたい事までも辛抱する。小兒に取ては随分高價な犠牲である。

篤子は學校へ行ても踊や三味線の事を思ひ出すと胸に釘を打たれる様な思であつた。「どうしたら環さんの様に上手になれるだらう、叔母さんに賞められる様になるだらう」其那事を考がへては茫然と柱の下に立てる事もある。或日彼女は學校で友達の群を離れて一人踊の稽古をして居た。彼様でもなかつた、慙うでもなかつた、今日は什麼かして賞められたいものだ。

「テントンシャン忍ぶ懸路は扱て果敢なさよテンツルテツチチンリン〜：：：」

手巾を手拭の代りに扱らつて一心に踊つて居る。

「何をなすつてるの？」と背後から聲を掛けた人がある。其れは篤子の好きな杉田といふ女教師であつた。

「踊のお温習をしてるのよ」

「爾？」と先生は微笑して。「學校で踊なんか踊つちや不可せんよ」

「踊は不可いものなの？」と篤子は不思議さうに先生の顔を見詰めた。

「何故不可いの？」

「其れはね、踊の唄や素振は大變に卑しいんですよ、爾いふ事はね重に藝者なんかが爲る事ですから」

「爾？」と言たが篤子は一向合點が行かなかつた。

「先生、藝者て何ですか」

「藝者はね女の中で一番不可い商賣をする者よ」

「什麼いふ商賣をするの？」

先生は顔を赭らめて黙つた、が聽て「貴方が生育くなれば解ります」

篤子は霎時何事かを考へて「先生其れちや叔母さんが何故私に踊をお稽古しろ

「言ふんでせう」

先生はぐつと行塞つた、而して篤子を自分の胸に抱き寄せる様にしてリボンを結び直してやりながら、「お家では踊つても可いでせうが學校では不可せんよ」

五

篤子に新しい疑問が起つた。家では可いが學校では不可い。學校で不可いものが什麼して家で可いのだらう。

恚ういふ事が屢々あつた。或日篤子は仙七を倉の中に見た。仙七は數々の道具櫃の間に挟まつて豹の皮を頭から被つて眠つて居た。一寸の隙を與へずに酷使はれる彼は、恚ういふ處に忍んで霎時の假寢をするのが何よりの樂みであつた。

「仙どん」と篤子は吃驚した聲で言た。

「へえ〜へえ」と答へた仙七は慌て切て頭を上げ。「なあに眠つちや居ません、一寸探しものがあつたから」

「私よ」と篤子は笑つた。

「あゝ篤子さんでしたか、私は環さんかと思つて」と言て起上る拍子に懐からこ

か／＼と落ちたものがある。きんつば 二つ三つ！。

「あら什麼したの？」

仙七は眞赤になつてきんつばを懐に振り込んだが、又た取出して。

「篤子さん一つ進ませうか」

「いゝわ」と篤子は答へた。

「どうか秘密になすつてね」

「何を？」

「此處で何か食べてた事を」

「食べちゃ不可いの？」

「叱られますからね」

「ぢや仙七は何も食べて居なかつたの？」

「まあ爾です」

「ぢや嘘を吐くの？」

「爾ですな」

篤子は不圖乳母が平素に言つた事を思ひ出した。

「東京の人は嘘吐きだつて本當？」

「其那事はありません」と彼は東京を庇護する様な口吻で言た。

「だつて食べたものを食べないと言ふのは嘘ぢやないの？」

「其りや爾かも知れませんが」と仙七は頭を掻き／＼言た。「けれども嘘を吐かなければお腹が空つても食べられませんからね」

「爾？」と篤子は涼しい眼をくる／＼動かして何か恸う大きな問題に觸れた様に

考へ初めた。

「どうしてでせう」

「貴方だつて其中には屹度嘘を吐く様になります、私一人ぢやありません、奥様

「どうしてでせう」

なんかは嘘だらけぢやありませんか」

「叔母さん？そんな事はありませんわ」と篤子は一言に打消したが又た。「爾かしら」と首を傾げた、と聽て叔母さんを悪い人にしやうとした事が大變な罪惡であるかの様に思ひ直してはつと顔を染めた。

「何をしてるんだ」と鋭い聲が聞えて琢磨の姿が見えた。

「いゝえ何も」。

「馬鹿言へ、仙七貴様は僕の靴を能く磨いて置かなかつたね」

「爾ですか……」

「まあ可いや」と琢磨は長櫃に腰を掛けた。顔を見ると毎もより機嫌が良い。

「僕は今ま活動を見て來たんだ、馬鹿に面白かつたよ、なあ環さん」と後から入り來る環に聲を掛ける。

「活動ごっこをしなくつて？」と環が言ふ。

四人の相談が一決した。先づ此に美しい騎士がある騎士の妻のヨハンナは美人である、其れを惡漢と淫婦が毒殺しやうといふ筋である。騎士は僕が演る、仙七貴様は惡漢をやれ」と琢磨が言ふ。

「私が惡漢ですか」と仙七は恨めしさうに言た。

「爾だ、爾して僕の妻は篤子さんだよ」

「ぢや私は仙七の妻なの？」と今度は環が不平を言ひ出した。

「私が仙七の奥様になるわ」と篤子が言ふ。

「厭だ、僕の妻は篤子さんでなければ僕は厭だ」と琢磨が言張る。到頭琢磨の言條が立てられた。騎士と妻と別れの一節に琢磨は篤子を斜に抱き寄せて美しい額に幾度となく接吻した。篤子は聲を立て、笑つた。

「厭です、其那事は厭です」と仙七は怫然として怒鳴り出した。